

武蔵國

武蔵國總社

所明神社

八丁驛路の左側あり延喜式内大

豆乃

天神社は是なり後世不至とく同く式内小野神社を

合せ祭る故

今兩社一社の稱あり神主ハ猿渡氏其餘社司

社僧等奉祀す

本社祭神

大己貴命 相殿 素盞鳴尊 伊弉册尊

瓊々杵尊

大宮女大神 布留太神 以上六神これを俗に

天下春命

瀬織津比咩命 稻倉魂大神 以上三神これを客來

延喜式

武蔵國多磨郡八座

大止乃

智天多磨郡

大國乃

皇乙卯始六毛田

所祭之大

新巳貴命也安開天六十七東

東

葛伊御鑑花所大蔵大喜

西豆産日祭祭麻國麻止神

三管氣之大新巳貴命也安開天六十七東

郎根武治新巳貴命也安開天六十七東

云兩衛兼稻貴命也安開天六十七東

云所渡六之命也安開天六十七東

推御年時以安開天六十七東

現中八以安開天六十七東

并畧月新開天六十七東

近為十和祭乙卯始六毛田

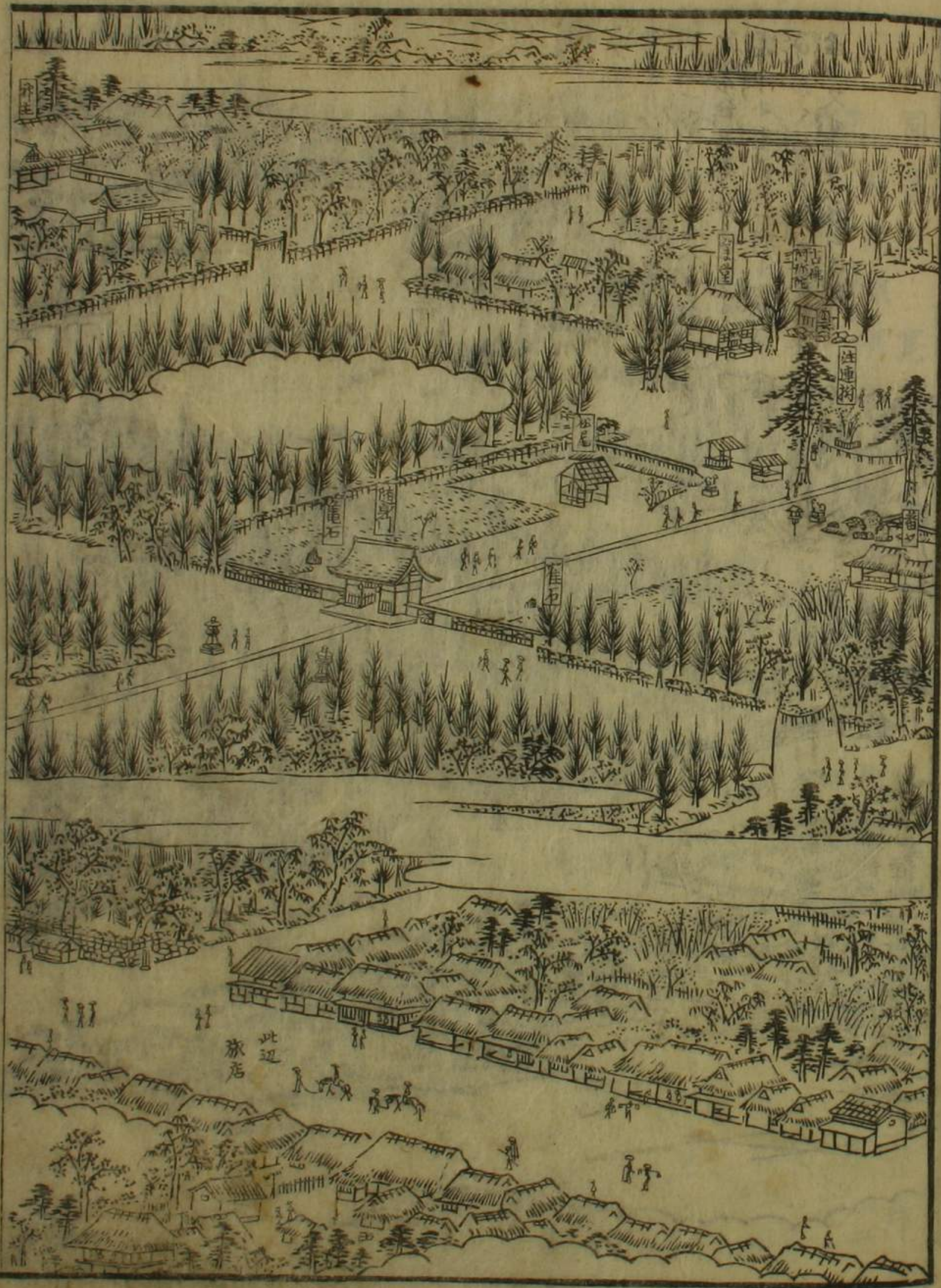
國御一日之云始六毛田

宮祈日之云始六毛田

社禱己酉及晚御臺所

武藏六所宮

昭和九年七月六日



府中六所宮



小野宮と分倍の境府中
 あり関ヶ原行進ハ
 往昔奥州の銀倉
 への通路ナルを
 陣海道と称す
 元弘の永享
 の間屢戦争の地
 あり
 字ハ
 あり



當社隨身門より
 外の列樹ハ鶴
 或ハ鶯其餘多く
 栖す毎小田川等の海濱
 あり其巢へ還ひ其雛を
 育せり此れとも隨身門あり
 内ハ一羽とくとも入りまき
 を社社七羽の一とす又
 寒中ハ至れハ一羽も宿る
 多し又其の雛の寒中ハ
 至り又其の雛の寒中ハ

同書曰 寛喜四年二月二十四日武蔵國六所宮拜

殿破壊有修造之儀武蔵左衛門尉資頼奉行之云云
 本地堂 本社左あり中庭ハ釋迦如来坐像と地蔵菩薩と安置せ

大般若経講讀此堂ノ神輿庫 同並あり神輿八基と収む内ニ神

阿弥陀如来鍍像 同左並高七尺七寸の座像なり上ハ假し此雨

又同藤原氏と二所より同文字と鑄上ハ假し此雨

又同藤原氏と二所より同文字と鑄上ハ假し此雨

又同藤原氏と二所より同文字と鑄上ハ假し此雨

又同藤原氏と二所より同文字と鑄上ハ假し此雨

又同藤原氏と二所より同文字と鑄上ハ假し此雨

又同藤原氏と二所より同文字と鑄上ハ假し此雨

又同藤原氏と二所より同文字と鑄上ハ假し此雨

又同藤原氏と二所より同文字と鑄上ハ假し此雨

又同藤原氏と二所より同文字と鑄上ハ假し此雨

又同藤原氏と二所より同文字と鑄上ハ假し此雨

又同藤原氏と二所より同文字と鑄上ハ假し此雨

又同藤原氏と二所より同文字と鑄上ハ假し此雨

又同藤原氏と二所より同文字と鑄上ハ假し此雨

又同藤原氏と二所より同文字と鑄上ハ假し此雨

又同藤原氏と二所より同文字と鑄上ハ假し此雨

又同藤原氏と二所より同文字と鑄上ハ假し此雨

又同藤原氏と二所より同文字と鑄上ハ假し此雨

又同藤原氏と二所より同文字と鑄上ハ假し此雨

又同藤原氏と二所より同文字と鑄上ハ假し此雨

又同藤原氏と二所より同文字と鑄上ハ假し此雨

東照大権現宮

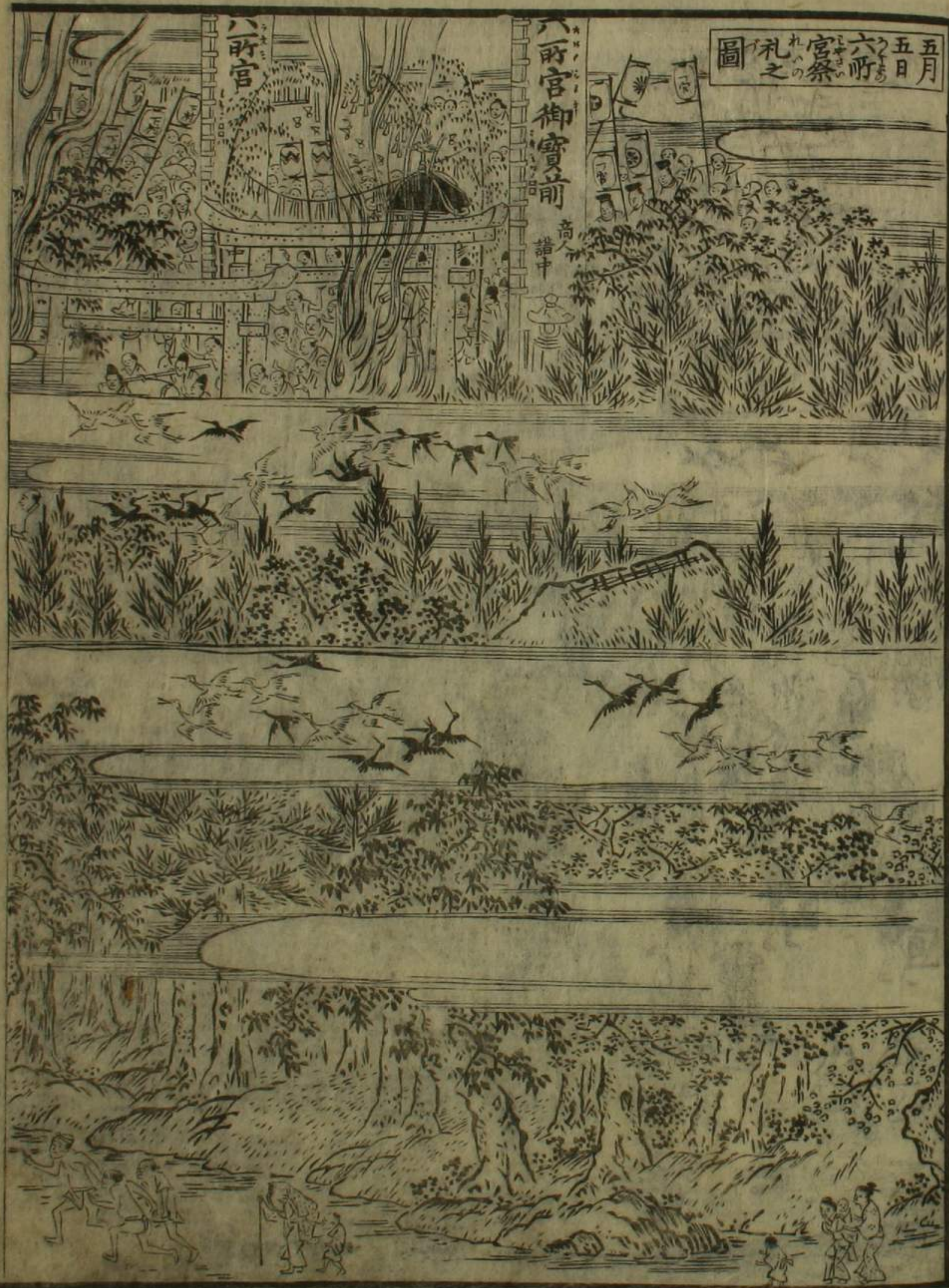
護摩堂

建長五年癸丑二月十八日丙寅彼岸初日

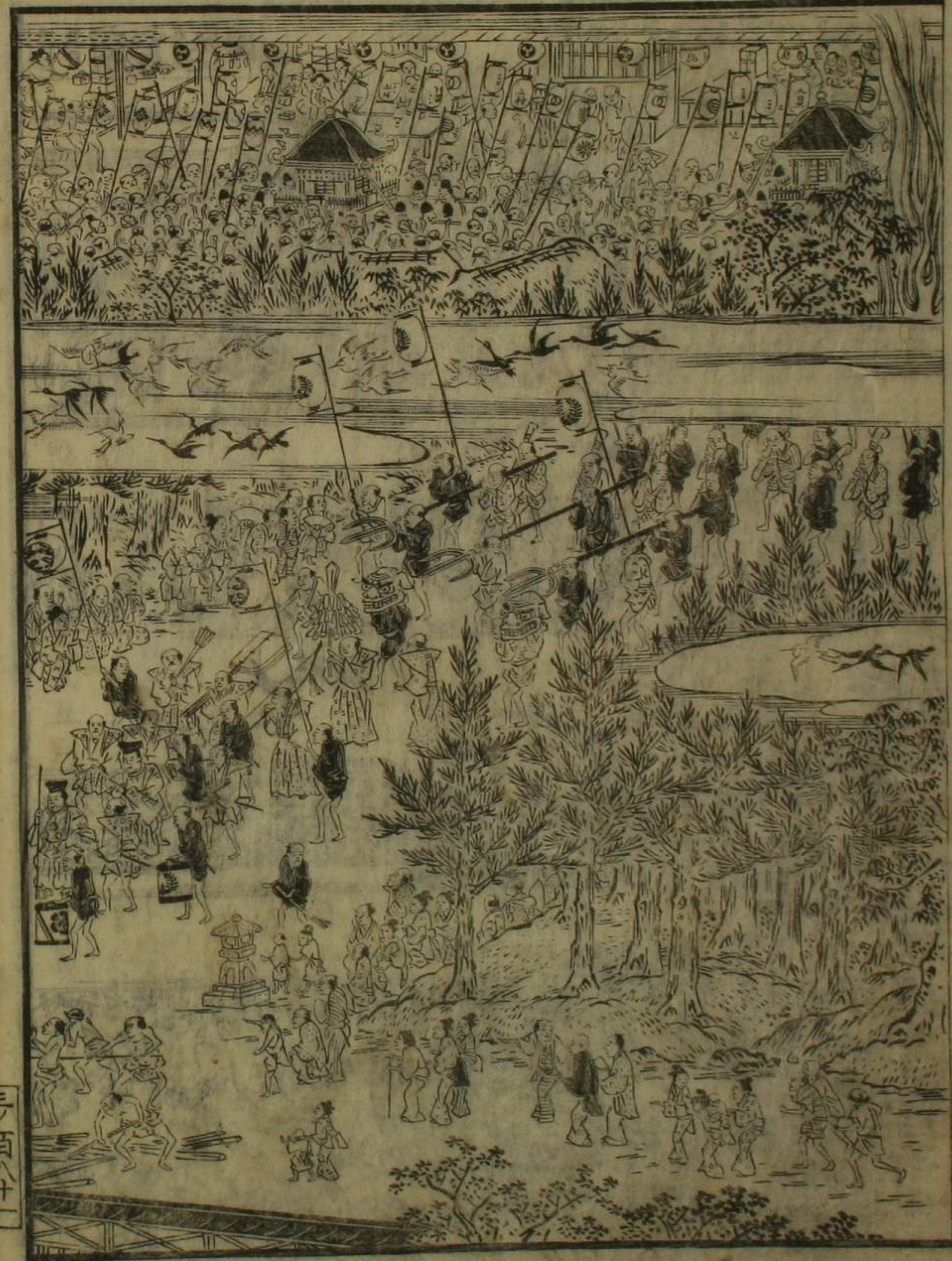
大勸進念阿弥陀佛明蓮大士藤原助近
 右志者過去二親并行嚴□新發意乃至
 法界衆生平等利益奉鑄一丈二尺佛身
 也

同並あり不動の像と御供所
 安置せ社僧明王院これとあり
 本社右の安座を元和注連樹
 四年戊午序創建とあり

枯林の中あり相傳の
 數十圍あり相傳の



田例なり 此家ハ大已貴命出現の時宿と求むるひと野人のありて一家
 穢れたりハ辞しやせぬの古き例を改すかくきとあり市旅の
 神式に式をく終る神主ハ神馬の
 来し市旅所の前におく流鏑馬と終り大鼓を打り社壇
 馬場ハ馬の上へ駆り一時小燈火を照らす先の間居の左右と本社の前隨身門の前西の
 馬場ハ馬の上へ駆り一時小燈火を照らす先の間居の左右と本社の前隨身門の前西の
 事 同六日小修の祠後百歩ありて南の方の稲田のありて
 仍此日當國の人民當社に詣り神田の豊熟我上におよぶと
 催し又種を異ますと終る徳と節の進退あり違ありて
 天下泰平神事 六月廿日小修の祠後百歩ありて南の方の稲田のありて
 六月廿日小修の祠後百歩ありて南の方の稲田のありて
 此日を以て小祭 七月七日は修の祠後百歩ありて南の方の稲田のありて
 祭の貢まりを餘のものとハ此地の交易ありて中七月七日と
 都の貢まりを餘のものとハ此地の交易ありて中七月七日と
 天下泰平神事 七月十二日十三日兩日の間宮之姫社と本社と
 ありて神楽を奏す前宮之姫の社の
 小祥 田面神事 八月朔日終日神楽を奏す前宮之姫の社の
 ありて神楽を奏す前宮之姫の社の
 社記曰 景行天皇の四十一年辛亥五月五日大已貴命此小野縣に





三其



五百八十五

六所宮
田植

五月六日、序田植の神意を武蔵國の人民早苗を携へ来りし神田の身と神より神童白鷺の形の造り物あり蓋針とさきりてせんまじりし乃傘と唄ひ舞ハ又さきりて今植並と唄ひて



由の中下り立て早苗を踏みぬりてまじりて踊るは有るや仰せむのちあつてまじりてのちあつてまじりて立ち兼未あむいあんとてうきりあ



出現神託ありあり祠を經營して里人崇敬し大塚乃豆乃天神是なり
延喜式大塚止乃豆と風土記大塚止乃知と豆ハ通音なり又大塚止乃豆後
麻止を以て於保麻止と或ハ布止麻止多麻止なりと云々稱へり
成務天皇五年乙亥兄多毛比命と云々此地小國造と云々
天徳日命の孫出雲臣祖谷二井因武藏國の國造の權典
宇迦諸忍之神救命十世の孫なり
又大巳貴命ハ此地出現の靈神あれハ是を崇とて祖神なりと云
素盞鳴尊を合祭兄多毛比命ハ出雲の國の蘇乃と云々の神祇ありと云
相殿小伊弉册尊瓊々杵大宮女命布留大神等の四神を配
祀し新小此地小宮祠を徑宮ありと圭田を附して以て國社と云
此を稱して六所宮大塚止乃知天神と云又天下春命一宮の祭神なり
瀬織津比咩小野神社の祭神なり倉稻魂大神小野神社の祭神なり以上三
神を六所宮の相殿小遷座なりと客來三所と稱し是を
祭る小國社の禮を以す爾來大塚止乃知天神小野神社二社合
祀の社ともありと云々あり 安閑天皇乙卯年小至りてハ春冬

二時の祭祀を行つて由旧史云々然小星霜を歴て康平
五年小至り源賴義義家兩公奥州安倍貞任宗任一族征伐
發向の時當社小詣り軍の勝利を祈願ありて夷賊平治
凱歌の時報賽と云々一華表の内左右兩辺小槻数株を種
めて以て成功を謝し其列樹今移存也治兼四年右大將賴朝公當社小
詣り請禱し大ニ戦勝の功ありと文治年間宮社を再興し又
壽永年間継嗣を求め賴家公を徵く葛西三郎清重哉
しく神器を獻せしむ寛喜四年中武藏左衛門尉資賴を命する
所の祭祀今小連綿として廢せり後足利家小至り迄世に
將軍家相繼て崇敬衰へす就中河入國小建む河當家より
信あり社領五百石を附し御祈禱の命を閑原
大坂の兩役中當社の神主猿渡左衛門佐盛道を御勝
利の御祈禱を修せし御感狀御直書を給ふ後二代

將軍家よりと又御書判の御直書を給ふ殊に御在國の
總社々々を以て慶長年間石見守大久保氏某を以て神
殿を新中一國家の祀典に列せしむ且命を下し馬市此
法則を定給ふ其後正保三年府中本町より火出く當社神
領の地に至る迄皆悉く焼亡を依て寛文七年丁未大和守
廣之侯を以て造營使とあり宮社御再建あり
寛永元年注此所の社記云神主猿渡三河守藤原盛正天正年間北条隆興守
氏照の爲に王子の城は籠る此城没落の時盛道此戰死也又此城火の災不
かり當社悉く灰燼せり城は亦頃世々將軍家の澄状或ハ秘蔵の神宝等
六所宮御旅所 六所明神より一丁半をり西の方府中番場宿の
中程相模街道への岐道札の辻の傍より毎歳五月五日大祭此
辰夜六所宮の神輿をよみ過し其式ハ前の条下
詳なり

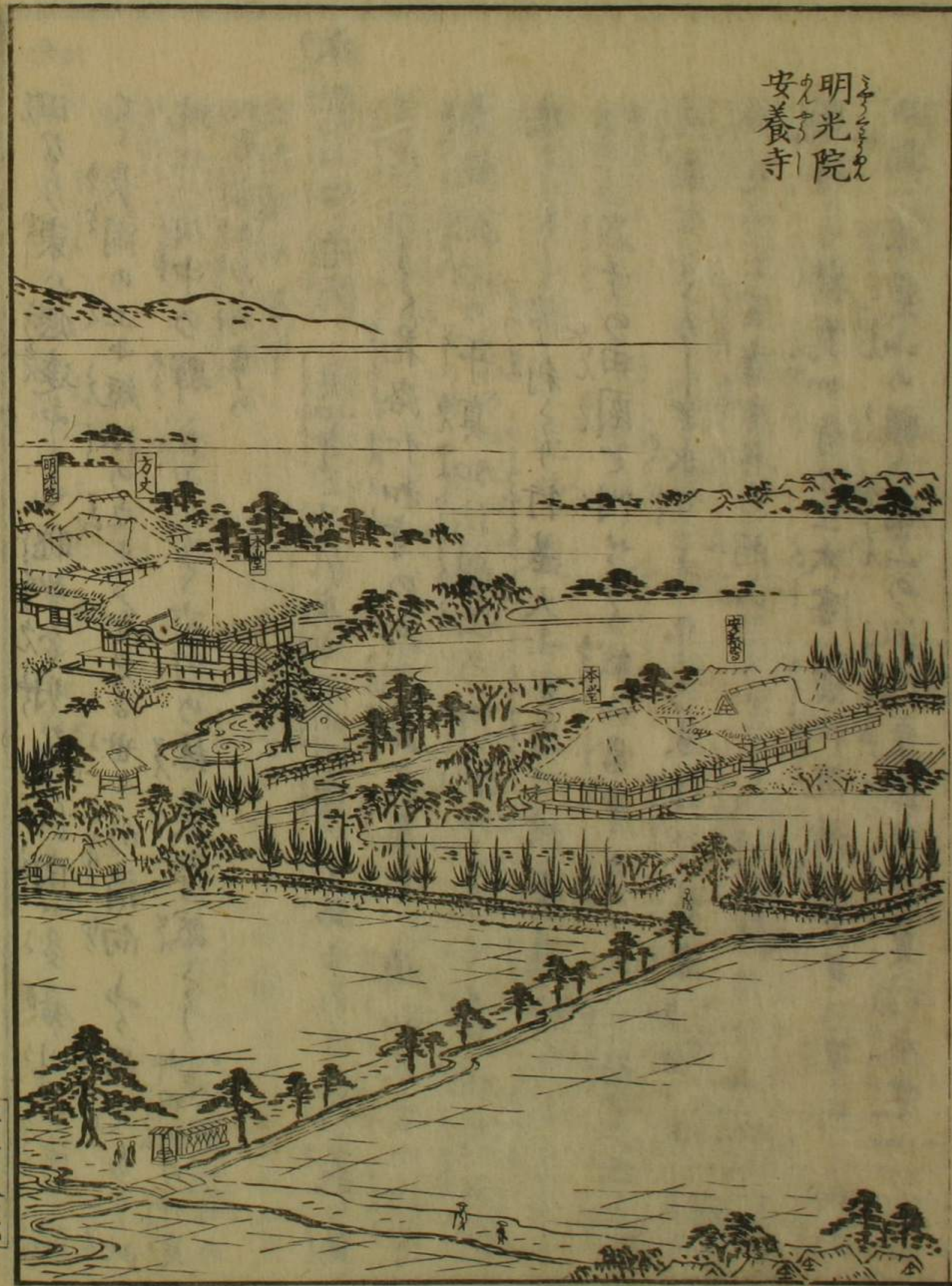
御田 六所の宮の後の小径を過く百歩をりあり豁然と稲

田なり東ハ悠遠中々眺望分明なる南ハ多磨川の流を隔
て長岡の上ハ短松の立をるを世ハ所謂向ハ岡是あり此
地北ハ府中の驛舎中々六所の林叢鬱然とあり
六所宮年中行事の
下ハ詳なり

本覚山如光院 真如寺と号し府中本町の南の小路にあり新義の真
言宗中々花浴仁和寺の御門跡に属を 清和天皇の御宇
貞觀紀元の年真如法親王の御願より慈夜僧正創
建あり佛刹あり行基大士彫造の地藏菩薩をなすと
長五寸 若干の田園を附せ然ハ當寺度々の兵燹に罹り大
五分 荒廢なりとあり永享十一年己未法印宥源 長祿三年己卯
再建し當寺中興の閑山とあり 天正十九年辛卯御當家本堂
家帯の額真如寺の三大字ハ勝仙院僧正日光の筆同し向拜
ハ掲る本覚山の額ハ南山の以門兼鎮の書裏門本覚山の額ハ



光明院
安養寺



天崎の筆書院無為心の額ハ佐々木玄龍の書なりと観音堂ハ
門の入口左の山比上よあり大悲殿の額ハ僧禪大僧正覺眼筆と云
本尊十一面觀音の像ハ巾長二尺五寸わりと聖德太子の作といふ
當寺什宝ハ北条氏照の書簡二通を藏せ其餘芦小鷺此画
幅ハ御筆の物なりと牡丹唐草ハ扇を縫物ハ五條の袈裟
と共に御當家より拾ふと云ふなりといふ

古磬一枚 華物中にて銅色變ま一臺ハ
左甚五郎より作らるなりと云

畷光山安養寺 妙光院の南の小路を隔て同し並びあり
此地の小路を矢の

崎と天台宗上州世良田の長樂寺ハ属を本寺阿弥陀め来を
座像一尺六寸をかりあり作者詳かり永仁年間海人中人與

関山より近き年地魚の災ハ罹りて日記を亡むといふ

武蔵國造兄武日命殿館跡 妙光院の前比岡を云上古國造居館
の地なり 御入國の後此跡ハ省耕の御殿と建せられより

大樹屢々入りせられり 正保三年丙戌十月十二日府中
本町より出火して此御殿焼亡せり 其後ハ御再興もあり享保

年間里民の乞ふ任せ陸田となり 下ささきあり 故小土人ハ御殿地
と称せり 此所の眺望を勝と云ふ

按日本國造ハ神武天皇都大倭國橿原に定め天皇の位不即あり時葛城
國の造を定め其餘功ある者ハ國造と賜ひ又縣主と定めありこの
代ハ任せられり和銅の比を德任の國造百四十員あり皇朝上世百四十

四箇國中々國毎に國造一人ありて神祇祭祀を掌りて民事を治
す 聖德太子の御宇ハ遠江國司又崇峻帝の御宇ハ河内國司とあり

是政村 府中の南多磨川の北の岸頭あり 此地の里正小井田氏の人あり
其家系を按ぶ祖先ハ島山庄司重忠の四男井田四郎重政の末葉あり

小田原北条家の臣井田攝津守是政の子孫なりと云天正十八年小田原
没落の頃八王子の城敗れより後此地に住を依て是政村の名あり

是政村 府中の南多磨川の北の岸頭あり 此地の里正小井田氏の人あり
其家系を按ぶ祖先ハ島山庄司重忠の四男井田四郎重政の末葉あり
小田原北条家の臣井田攝津守是政の子孫なりと云天正十八年小田原
没落の頃八王子の城敗れより後此地に住を依て是政村の名あり



分倍河原

陣街道

洞塚

悲願山善明寺 圓養院と号し府中本町より瀬戸へ行道の右側小

あり相模御道古の湫倉通道天台律院より常明院に属す本寺は阿弥

陀如来の像を安す坐像一丈六尺あり胎中慈覺大士彫造の阿彌

久く中古寺院荒廢して記録と失せ然るに近來編無為解脱居士

俗稱依田伊蔵 眞鎮とあり當寺と再興あり證海上人と申奥潤山と一田園

等を寄附せり故に居士の肖像あり東帯の像なり側小内陣の額小

毗尼藏とあり准后公遵法親王の志等あり解脱居士の墓を

堂後小あり彼岸山文庫ハ本堂の右小あり庫中収蔵せし此

書籍ハ解脱居士の菴書中とせし二百二十二箱あり此文庫ハ紙巻の書

津保宮 同所四丁とあり西南の方下河原農民の地小あり當社ハ國造

の靈社なりといふ今徳小茅祠を存するものとされ毎歳五月五日六所

宮大祭の爲ハ當社より六所宮へ奉幣使を立るる旧式中則六所

宮の神官馬小衆とて是を勤む

分倍河原

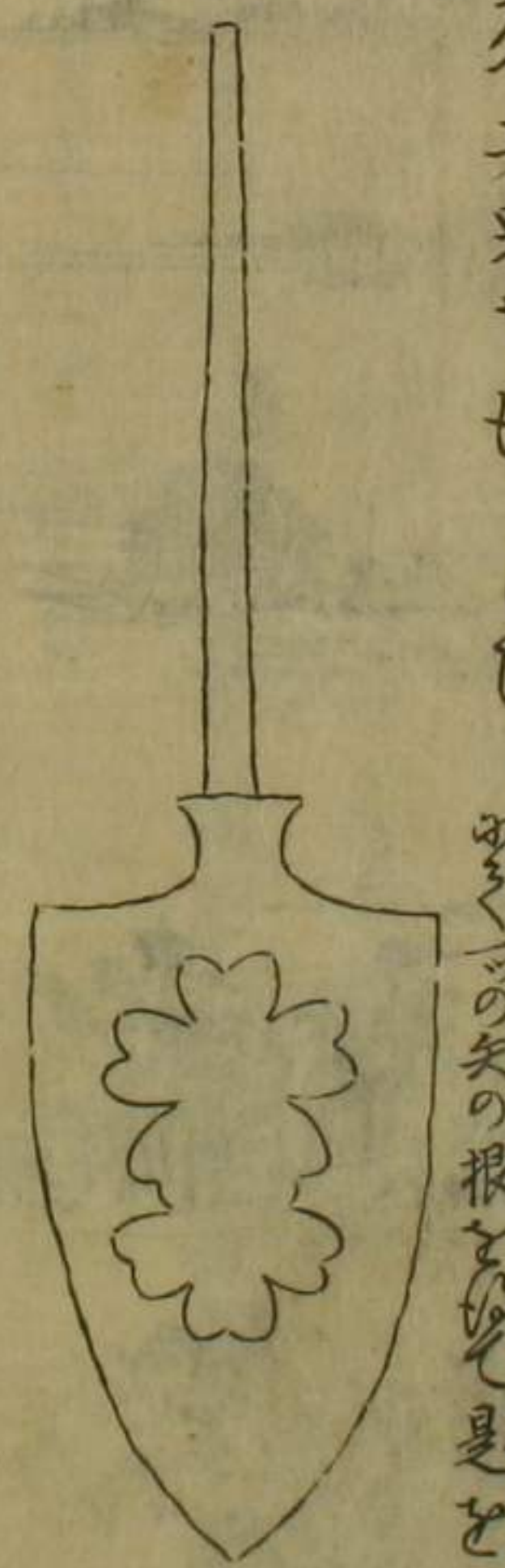
按津保八壺の淵や〜つわきとの入意なるん源氏物語桐壺巻二の終り云々
元年中壺能哉は多を植まを〜云々
云々
同所の南代小川を隔る耕田をいふ
今下河原中河原村と稱す
大平記藤倉大草紙南朝

戦ありし地や〜時討死せし人の墓あり
今猶此所の田間を存す
土人首塚洞塚をいふ

亨徳四年の春も徳倉成氏上杉房頭なりしひ小持朝と此地を
争戦し大上杉勢敗北も又亨徳三年の夏八北条氏康向う岡の小澤

の原ゆ屯し上杉朝興も多磨川を前ふあて陣とる西軍府中の驛
あて相戦ふ此上の合戦大平記藤倉大草紙
此餘も度々血戦ありし地なりし主人今
遇此所の田間を穿て兵器をばりしなり
此地小野宮内友重高と云ふ人此地
ゆりつ矢の根をばりし是を名にす

大サ圖の如し
透し花ハ



三千人塚

六所宮より南の方十五六町計を隔る道端あり
板石の古碑を建てり漸く大かたす枕字一字
此の石碑を壘に
此の石碑を壘に
此の石碑を壘に

代小川 府中の南を流る西の方二里ありしを隔る青柳村より多麻
川の水を分る此辺耕田の用水とせり或人云古此地を小川郷
と号し今の代小川ハ即往古の小川の名称なりん欽と云ふ

このやとありす
按慶長年間官府より六所宮へ寄たまひ書の中ハ六所宮川傍ありしを
注されしハ三項多麻川の水流通條より分れてきたり
あつた地界とありと慶長以後榎を削り川を埋め壘にせしあり
字一同一漸中河原と号する標何れとも川を隔てしは

陣街道

小野宮と分倍との間の耕田の地や〜府中本町より関戸へ
行道の名と云昔奥羽等の國より鎌倉或ハ大磯杯への往還此
道中へ鎌倉より北國東國へ軍勢を向ら〜頃の通路なりし

行道の名と云昔奥羽等の國より鎌倉或ハ大磯杯への往還此
道中へ鎌倉より北國東國へ軍勢を向ら〜頃の通路なりし



小野神社

たふかく称せしもの

小野宮村陣街道を隔てて分倍より良小當り地をあらわす府中本

僅に家敷三十軒と云々の小野ハ上古郡村定らるる時よりの号あり

小野縣と稱せしもの是なり今ハ府中の舊名と云ふなり和名類聚

抄小多磨郡小野乎乃とあり

兩發の始ハ漸田敷五交程あり

北田間の塚ハ中古の甲州街道府中より日野へ往還の一里塚ゆゑ今も野徑と古街道と唱ふ

小野神社舊址 小野宮村陣街道の右あり今癒小叢祠を存するもの

武藏國風土記曰多磨郡小川郷

延喜式神名帳曰甲午始行祭禮有神戸巫戸等云云

三代小野式神名帳曰甲午始行祭禮有神戸巫戸等云云

野元慶八年七月十五日癸酉投武藏國從五位上小

社記云當社祭神上古八瀬織津比咩一座なり一宮下春命を
 遷座なり又倉稻魂命を配祀して小野神社と三神となりま
 りせしる其時世あつて最舊社なるを以て 成務天皇五年
 乙亥の秋諸國々々國郡小造長を置あし時兄多毛比命も
 詔をもち當國の國造として此地に至り小野縣小府を闢さ
 一より後崇敬厚く再び當社の御神を六所宮の相殿小遷し
 らせらるり終り 六所宮小容米三所と林をさすもの即是なり下春命を
 六所宮に遷座の所神あれども却て是をさす祭りと
 六所宮を兼一とせり ありより 僅に茅祠一字を存し
 其舊址を標するのこなりと之を實小千載の古を想像し
 榨枯樹社の後あり今蟻根を存するの周圍計其根上百人を座
 神道 多麻川の南一宮より此地小野神社へ通る田畝の径路を云
 古一宮御神より小野へ遷幸の時の旧路ゆり中古迄一宮の祠官
 此路を経て小野社に至り然して後六所宮へ来りしとあり其頃一宮

あり空輿を昇来れり小野宮邑の里民擧て多麻川の岸頭
 まて送る迎せし一宮祠官の口碑小伝
 小野牧 今小野府中の北國分寺の邊より小川砂川の間の農
 田となり一其牧の舊跡なりと云傳ふ 尤田名なり 猶前の小野宮地
 名の条下 往古當國の國造年々八月に至り此地ゆく駒を撰て
 鳳闕よ獻しとなり公事根元ハ八月廿日武藏國小野御馬
 四十足を引りて 六所宮馬市及馬場の
 拾芥抄曰 年中行事部 小野御馬云云
 又 八月二十日 牽武藏小野御馬云云
 又 同書 田比牧名 立野 小野 秩父 已上武藏
 延 喜式 武藏 小野 秩父 已上武藏
 石川 武藏 小野 秩父 已上武藏
 御式 武藏 小野 秩父 已上武藏
 石川 武藏 小野 秩父 已上武藏
 右諸牧 武藏 小野 秩父 已上武藏
 等諸牧 武藏 小野 秩父 已上武藏
 齒四牧 武藏 小野 秩父 已上武藏
 上若 武藏 小野 秩父 已上武藏
 同書 武藏 小野 秩父 已上武藏

史ありと際さあひしを各ありとく実なく澄とくさるるにけしと
 観音堂 表門をへて西面あり 観音ハ木佛立像七尺あり 左右
 六観音の像ハ何れも四尺五六寸あり 作者詳ならず
 當寺ハ足利家の再興より 永徳元年鎌倉左兵衛督氏満小山
 義政退治とて發向あり 頃も當寺ハ陣座を儲けり又應永
 六年ハ左兵衛督滿兼周防の大内助義弘ヲ京都ハ於て逆心を
 起せし時同十二月廿一日京都のふ合とて當寺ハ動座なりあひ
 同三十年癸卯春も又常陸國の住人小栗孫五郎平滿重ヲ謀及ハ
 あり 鎌倉より持氏公結城へ發向同年八月小栗落城の後同十六日
 當寺ハ歸座同三十一年十月廿三日當寺炎上あり 同十月
 十四日持氏公鎌倉へ還御あり 當寺ハ鎌倉大草紙にえ
 たり 當寺什室の中は往古多氏公陣中にて用ひられしと云古き洞瀧一口あり
 石上山弥勒寺 般若院と号し高安寺より六町あり 西の方同一
 街道の右側あり 真言宗ヤク府中の妙光院ハ属を開創此

始久しく今あるは永正二年乙丑權大僧都法印良孝
 中興を本とし大日如来ハ一尺斗の座像なり 作者未詳當寺ハ
 津戸勘解由左衛門尉菅原規継墓あり

津戸勘解由左衛門尉菅原規継
 延文五年七月十日 沙弥道繼
 門尉菅原規繼

谷保天神社 同ハ街道西の方谷保村道より左側あり
 別當ハ安樂寺と号し祭礼ハ毎歳二月と八月の廿五日又三月十五日
 小八間扉あり十一月三日ハ當社往古天神島と稱する地より今此
 地ハ遷座なり 縁あり 此日ハ小菜供を献備せり
 本社祭神天満大自在天神一座神祇ハ菅家弟三嗣菅原道武

按此勘解由左衛門規継ハ津戸三郎為守の氏族なる為守の墓ハ八王
 子の觀池大觀寺あり今ハ幡宿の農氏六右衛門とすものあり津戸氏



清水立場

甲州街道の立場
 一七此辺にかゝり
 清泉涌出せり
 清水村の稱ありと
 云此地は酒舗あり
 て店前清泉沸
 流を夏日は索麩
 を湛して行々饗
 應せり故此地
 往来の人々小
 憩ひて炎暑
 を避るるハ



朝臣の手刻なり

額 天満宮 後宇多天皇勅世尊寺經朝卿筆

額の讓小左のゆきの二十四字を刻せり又外は同額の写一枚あり水戸黄門
 光國卿もよきを納りなすひとて裏書ハ元禄三年庚午眉毛軒河井門
 徑朝卿の筆せり額の背面は日

建治元年己亥六月廿六日し丑書之

正三位藤原朝臣經朝

常盤清水 裏門出口道の端小池あり中島弁財天を安置せ清泉湧出

紫の僧某當社へ詣り項和奇を詠せ常盤の清水と稱せり延宝年間筑

本地堂 本社の右の岡あり本堂十一面 道武朝臣靈社 本社の後

社傳云昌泰四年菅公筑前の太宰府へ左遷の時卿三男菅原

道武朝臣も又此地に流さるるせの三年の星霜を経ぬる悲歎の

延喜三年二月二十五日父君菅公筑紫あくる亡あひぬるる悲歎の

あり配所の徒然小父君の御像を手親模刻しあひ旦暮在る

如く事へ孝道の誠を尽さざるひしと後一社奉し
昔ハ大社にて僧房も多かりしとあり櫻本坊邑盛坊尊住坊梅本
坊松本坊滝の坊以上六坊中古遊も御残りありしハ夫々廢れて
今ハ滝の院と号する一字天曆小至りてハ村上帝狛犬一雙を寄附
の之様是古の遺の坊あり又大般若經四卷を収む源義経朝臣此
奉納なりと云伊勢三郎龜井六郎及ひ舟慶等の
四人書寫せし経卷なりと云

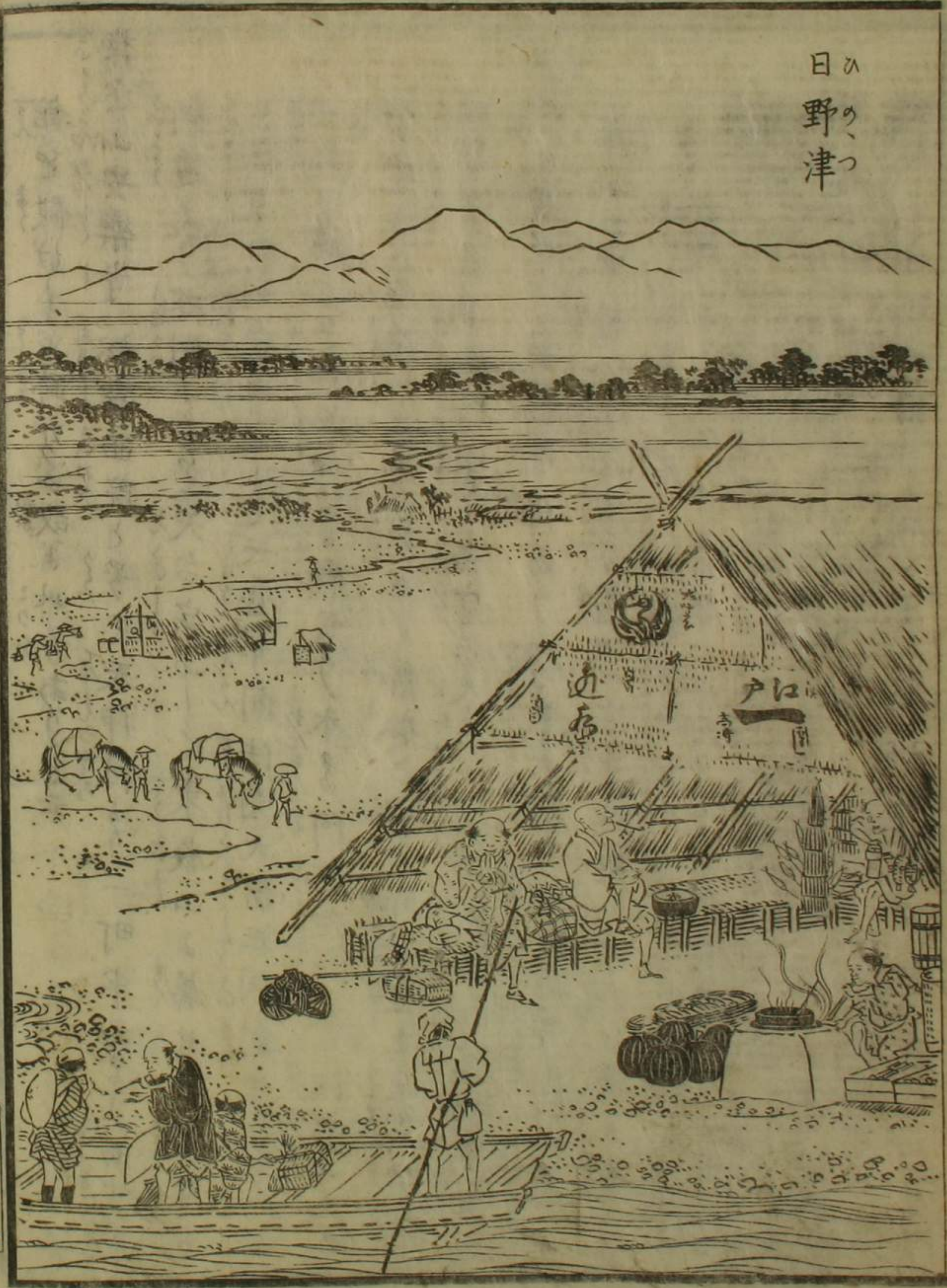
菅原道武朝臣舊館地 同所二丁許南あり空堀城門の跡と覺
す所も是をく四方二町あまり此封境なり土人三郎殿屋敷跡と稱
す相傳ハ三郎道武此地に住一當地の縣主上平太貞盛の女を姫
一子を得たり其子を菅原道英と号夫より六世の孫を津戸三郎
為守と号す津戸為守の御女を或云此地ハ貞盛舊館の地なり
道武主貞盛の御女を姫りし事未詳

假家坂 同所安樂寺の門前百歩計街道の西の方へ向ひく上坂を
云建治二年奉幣使此谷保天神の宮へ下向しあひ一頃假旅

館を假け一旧跡なる故ハ此号ありと云
梅香山安樂寺 松壽西院と号す天神社より一町半あまり西北の方

街道より右側小あり天台宗ゆき東嶽山に属せり當寺を
天満宮の別當寺ゆき天曆年間法圓大僧正開創せりと云
中興ハ津戸三郎為守を願なり本多阿弥陀如来ハ法然上人の
作ゆき座像一尺五寸計あり佛躰の中は為守注する血文を
収むると云其余什宝は為守の太刀一振同画像一幅同甲冑の
中ハ篋ありと云薬師佛あり傳教大師の作と云像材ハ沈香小
一十二神將の像迄悉く高サ一寸斗比厨子の内は造り葺られ
津戸三郎為守の墓ハ八王子の市中觀池山大善寺とのハ十八檀林社
津利ハあり寛保壬戌五百年の遠忌あり後裔津戸六郎右衛門法名
順譽とつる者造立せし石碑なり又為守住り地ハ同所多麻川の南
嶺石田の地あり今ハ幡倉の中ハ子孫連綿と相續せり津戸三郎
為守ハ法名を願と号す文章博士菅原孝標常陸守俊朝臣時武藏
國の總追捕使秩父權守平重總之姫小孫一子を生む名を津戸次郎為廣
馳泰一賴朝公の旗下は属一度軍忠を願し名をあけしと云

日野津



供奉 同三月 洛小入 同日 法然上人の庵に参り 念佛往生の道と兼りて
 法名を授け 行者となり 建保七年 竟に出家とて 先上人より 贈りて
 同十一月十八日 結願の夜 穢土の住居 無益なりと 高聲を念仏し 如法念佛を修む
 切五臟六腑を取出し 律大呵は包忍ひ 後の河へ捨せし 念仏の自腹がき
 なり 八人更し 知りて 苦痛なかり 十九日 至りて 糞穢の心地か
 り 九日 息男 民部 大夫 守朝 此の告を告ぐ 小あり 始り 人も あり 翌年の
 正月十三日の夜 夢に 来り 十五日 午 刻 迎ふ 由 上人 告め 覺て 後 伴の
 日 至り 上人 あり 夢の 袈裟を かけ 念珠を 懸け 西へ 向ひ 端座 合掌し 後 水
 高聲を 念仏し 午の 正中 息絶ぬ 紫雲 空に 變鍊し 異香 室より 裊り 後 水
 樂を 掛く 五十七日 氣力 常の 如く 往生 せし 念珠 袈裟 等を 相傳へ 披露
 して 念仏 せし 唯 是 願ふ 不思議の 奇 特を 載す の 要を 撰 録す
 玄武山普濟禪寺 日野渡口より 此方の岸頭を 右へ 十丁斗 入る 芝崎
 村と云ふあり 此の 立川と云ふ 郷の 濟家の 禪林 あり 相州 鎌倉の
 建長寺に 属せり 開山ハ 真照 大定 禪師 物外 可什 和尚と号す 頃
 二年 癸卯 十二月 八日 寂す 本寺ハ 正觀 世音 座像 二尺 斗あり 左右に
 十六 阿羅漢 十大弟子 等の 木像を 安ん 共ニ 作者 詳ならず 中
 與大 檀那ハ 立川 宮内 大輔と 稱す 法名ハ 宝山 道貴 大禪 定門と



芝崎
 普濟寺
 境内の御延文
 年御まき
 所の六面乃
 石塔と存
 存



靈碑ハ當寺ニありて
佛殿惣門の内あり本尊ハ釋尊ニ
文殊普賢二尺斗共小作者をありす
平高親等の名を記せりと
五十嵐市左衛門感状曰
景虎涉出陣三田彈正忠政定先陣而大幡
陣所八王子埜至北条氏照及一戰没為之所五十
嵐市左衛門竹田新八郎ト云武士ヲ討死ニ番着到
賞功不跡時芝崎三十貫文判ヲ被仰下者也
依る如件

永祿三庚申年三月七日
立川宮内重能 在判

開山大定禪師真像座下之記曰
彩色啓端造立助縁芳衛辨翁啓範宗來啓一宗華

宗義啓端宗順啓勝宗範啓壽壽性了宗宗快翁
塗師行盛佛師上總法橋朝宗幹縁比丘啓達
應安三年戊十二月三日 敬記

當寺境内北の方ハ往古立川宮内大輔某の宅地たり
數年合戦の地中今猶林中ハ首塚と稱するものありハ
と云今も皇の跡と覺れ地存山折ト云矢の根の類の武器を
豊太閤の朱章あるを以て當寺天叟宗祐和尚
御開國の砌寺領を乞奉り朱璽をよみ又宮内大輔為討伐
佛閣を放火なり静謐の後ハ修理せしむとある 證状を
其後住持覺榮宗理 弟天叟の 事愁訴せしむ御加増あり
旨被仰下とのとも遅く先榮和尚改衣の為上京あり
途中迂化せり後久しく無住の寺となり朱章を欠と云然る
寛永の未住持大年との僧當寺に住せり故わりく廣福寺
とて不退去せしむ 什宝の古文書古器の類を悉く持去れ

と云々今ハ寺の朱章を傳へ存せしもの

日本年代配合鈔曰
永正元年甲子九月廿五日立河原於山内顯定扇
谷上杉朝義合戦朝義軍敗太田下野守為始多兵

南朝紀傳康正元年己亥正月廿日鎌倉成氏と房頭ハ定政上杉長尾景中
武州立川原合戦云

小田原記云永正元年甲子九月廿七日駿河の今川氏輝并小田原の松田左衛門頼重を
加りて此勢を合せ扇谷の五郎頼良大將軍と武州立河原へ陣營を
布山内の管領上杉民部大補可淳入道并當屋形憲房東八州の軍兵を
催し押寄たりあり夜ふたれハ山内の加勢と越後の軍勢を合せられ
朝良ありて多かけそりて河越の城は落延梅酸の渴をやむむり

六面塔 卯塔の中あり高さ六尺をかり一片の幅一尺五寸ありあり
六面の石ハ一片ハ蓋石と臺石とを穿ちて立合せしものなり
前面の二枚ハ金剛密迹の二王を彫刻し後面左右の四枚ハ天王の像を刻
せり上の方ハ何れも宝冠の飾りありて常の石工の妙なり
ありす極めく妙作なり增長天の一片ハ報号等を刻せり左の
延文六年辛丑七月六日
施財性了立
道圓判

按前より奉る所の開山大定禪師肖像座下の記文ハ性了の各あり六面
塔の財主性了一なる一延文六年ハ康安と改元の年ハ應安三年に至り
るの十年なり然れハ此一人なる一

普濟寺境内六角古碑

高廿五尺手 巾一尺四寸計

那羅延堅固



密迹金剛



增長天王



多聞天王



持國天王



廣目天王



當寺境内の地ハ多磨川の流ル臨ミ勝景の地ナリ富士箱根秩父郡の遠嶂等一望小遶リ尤幽趣あり北の方ハ往古立川宮内大捕某々城營の旧址ナリ其形勢を存シ懐旧の情を催ス又小田原の北条幕下ナリ五十嵐小文治と云ふる人も此地ハあり由土人云傳ヘリ前小頭セシ永祿三年の感状云々五十嵐市左衛門と云ふる名を注シ何れも其氏族の徒ナリ此故小今也此地に五十嵐氏の人尤多シ

按ヨ五十嵐小文治ハ和田合戦ハ朝比奈義秀ヲ討レトス人ナリ是を混シトス人

八幡宮 同所二町ニ有リ北の方ヨあり神主宮崎氏奉祀を祭神本多別命一座相傳建長四年癸子八月十五日勸請セリと云本地佛ハ阿彌陀如来ニシテ黄金仏法丈四寸八分あり弘法大師の作ナリと云

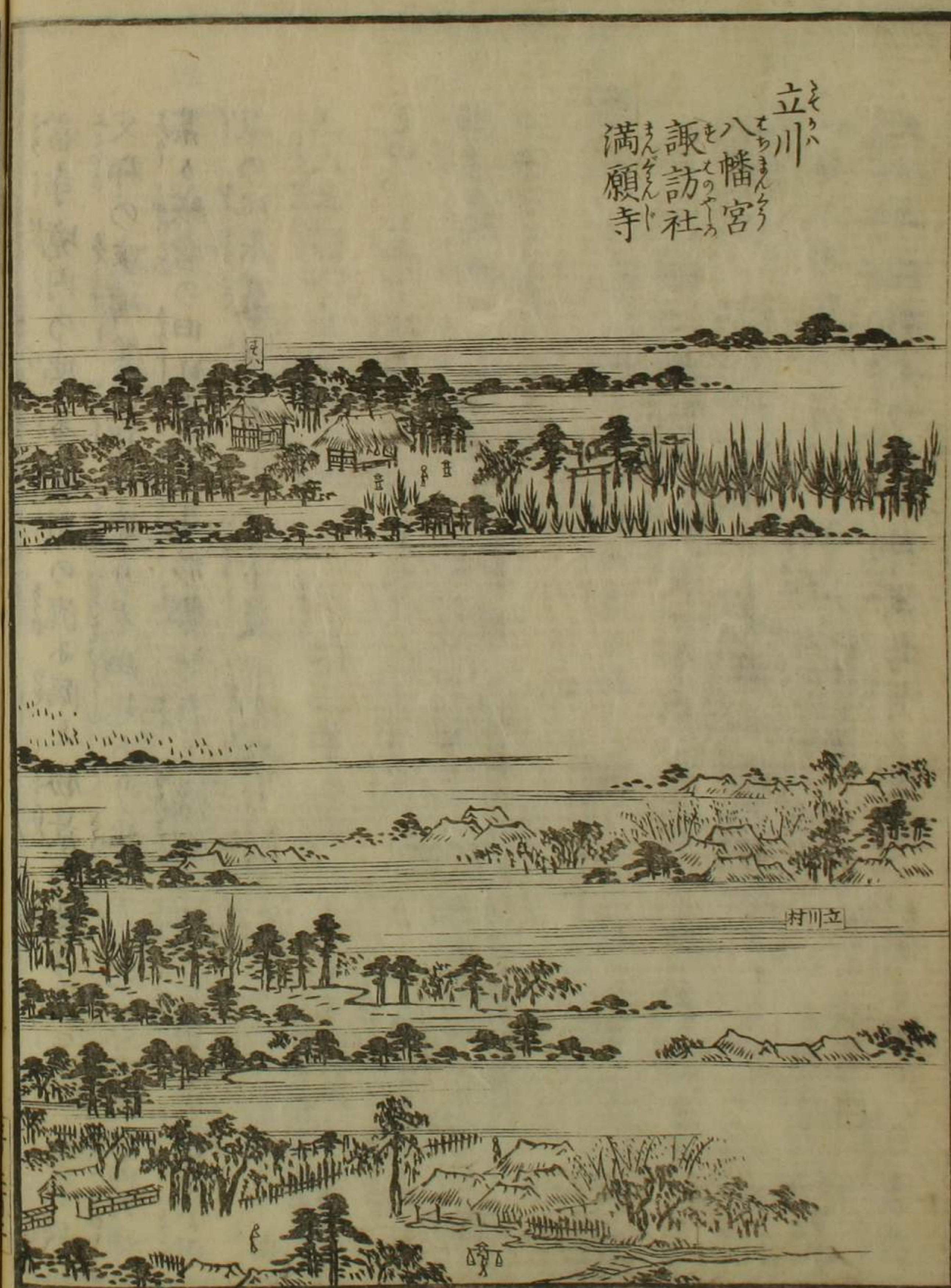
背面ハ假面の如ク四ツツ基古色ナリ然ル小神殿鳥有ト云

天正年間野火の爲ニ神殿鳥有ト云

此時ニ至リテ失



立川
八幡宮
諏訪社
満願寺



立川村

あひく其所在を知る人なり 仍此地の領主立川宮内某の室
此を深く歎き思ひ新に彌陀像一軀を鑄く當社小取らんと
す 佛鉢の背面は鑄所の文次と記せり 披は新像の膝は梅鉢の夜あり
其後宝永年間宮社を造立せんとせし時境内松の枯株の根を
穿ちて鋤下小失ふ所の本地佛金像の彌陀如来を得たり
又安永五年の夏賊の爲に奪つるものとも靈威あを
以同年八月四日再當社小還座なり ありとかりと
天正年間新造立所之本地佛之銘曰
武州多摩郡立河郷芝崎村八幡本地并與願主
于時天正拾四甲戌年三月十五日
本願大夫式部
大工推名土佐守

後光鏡之銘曰
武州多摩郡立河郷芝崎村八幡宮 鏡一面
爲家内安全
元文四年己未八月

醫王山萬願寺

同所南の方四十歩計を隔り黄檗派の禪窟
中へ鑊牛禪師居住の草庵の旧跡なり 一と後小一宇の蘭若と
なせしといふ本寺薬師如来八座像三尺計惠心僧都の作なり
服士小日光月光十二神将等の像を安せり

額本堂
向拜
岳悦山筆
山王醫
額堂内
侍中與別
峯旦筆

東聯
左石
樹の
掛の
黄檗
高泉の
筆

諏訪社八幡宮より六十歩斗東よりあり祭神建所名方命一座相
傳弘仁二年辛卯七月廿一日勸請せしといふ當社小宮崎
氏兼帯奉祀す

多磨川 當國第一の勝槩とを 和名類聚抄多磨川作り太婆と詠
篇多摩とす後世玉川作 萬葉集多磨川伊近江陸奥等の國にあり
此の玉川と共小ありせし 六玉川と稱せしよりかき文字を
此の川ハ武州の礪丹伎山と稱せし 多摩郡の丹波村に流る
いひしるなり 日蓮上人往画讚大士臨終の時池上より移り
武蔵國田波河

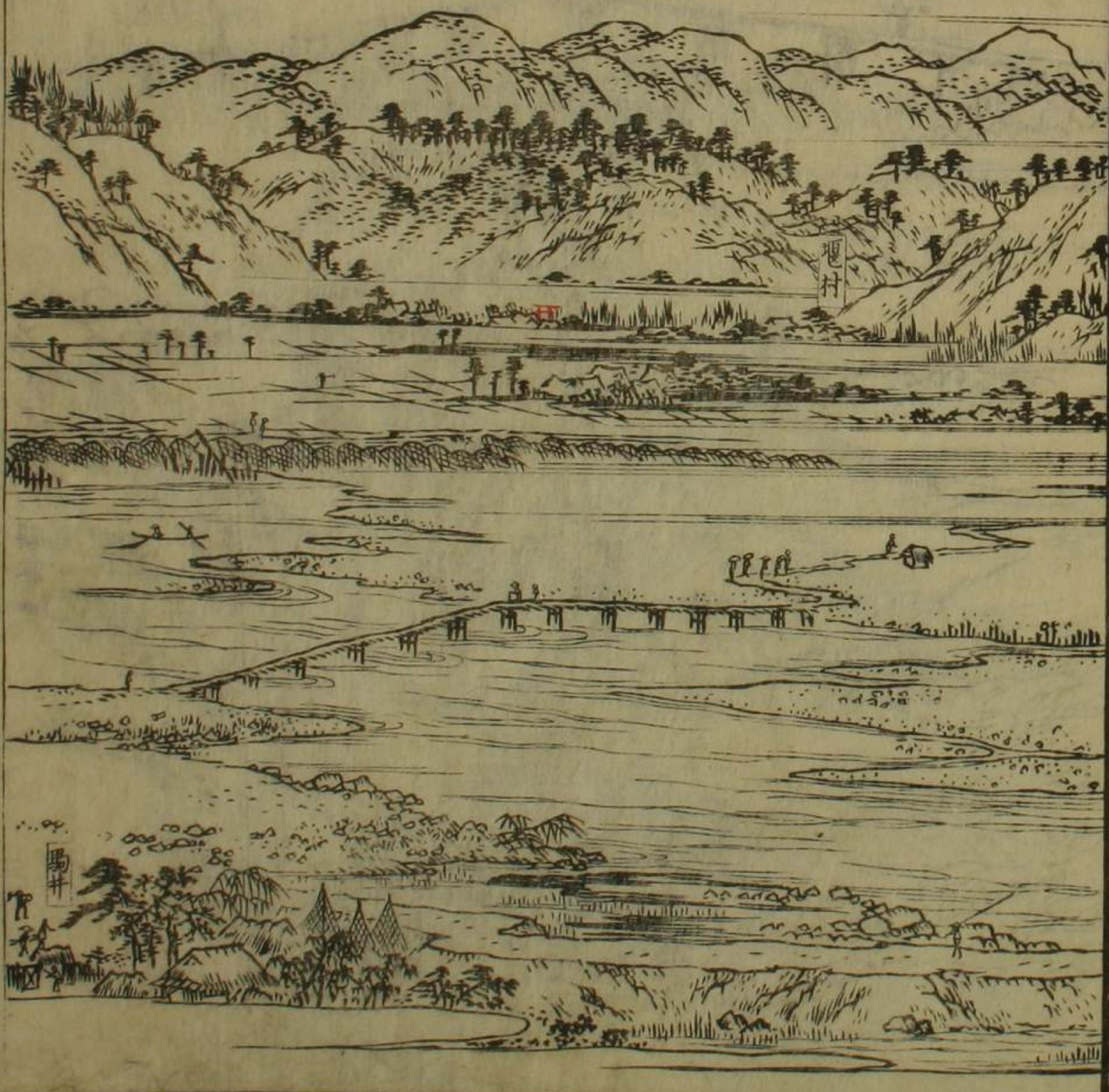


多磨川
六ヶ所
今川の
多磨と

高尾山

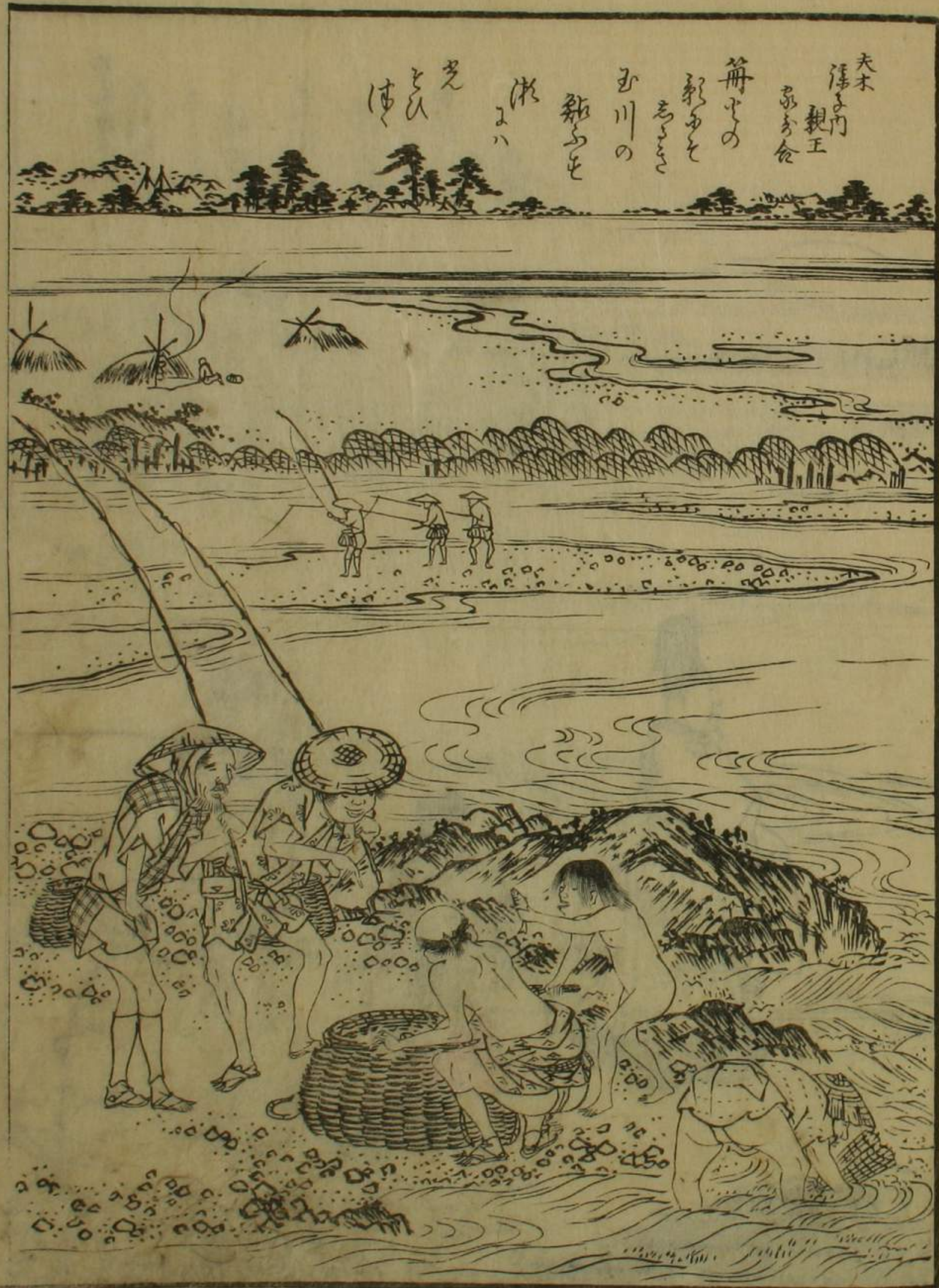


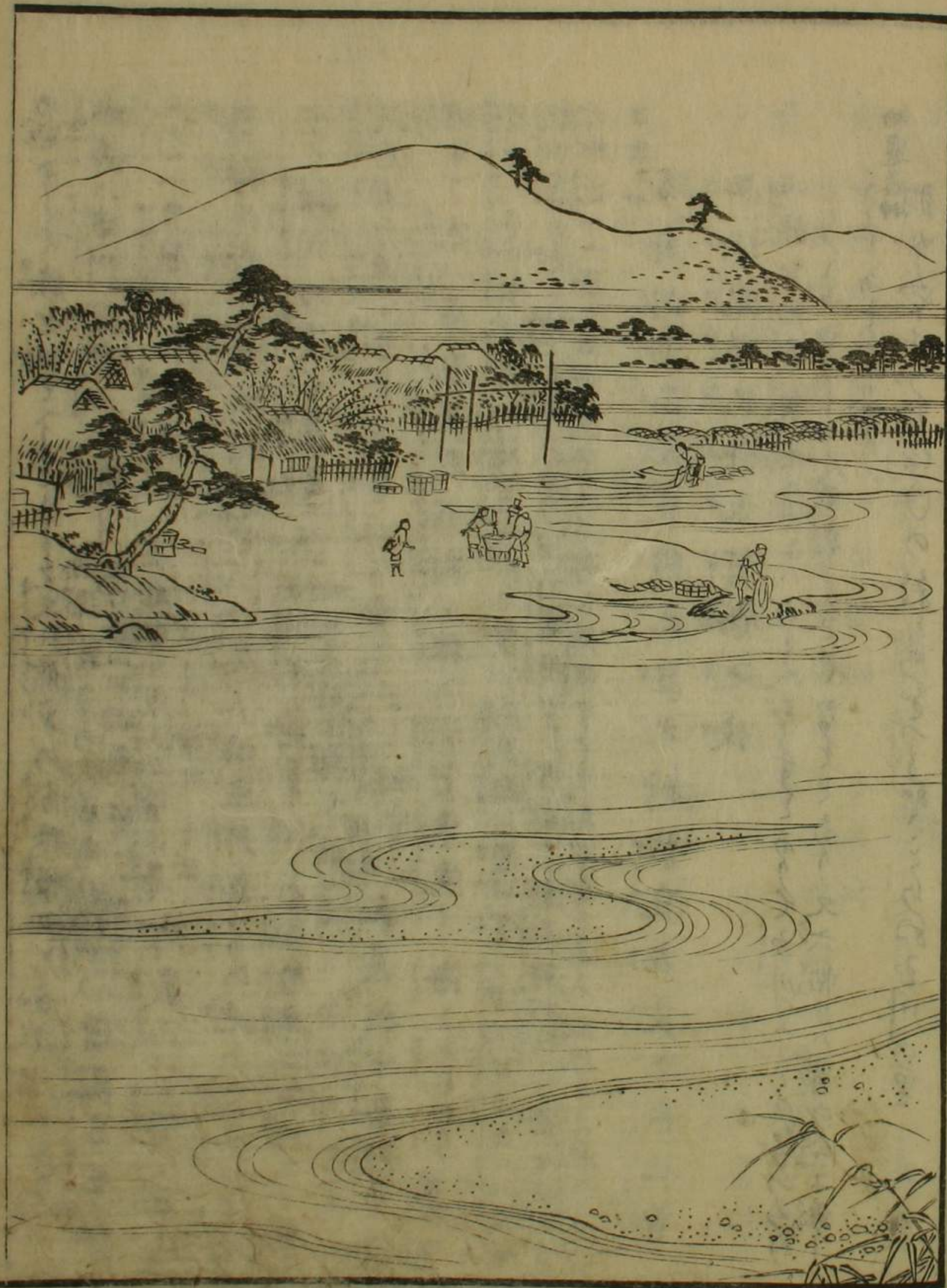
玉川ハ砂場廣
 豁中々其流れ
 一帯よあす多く
 雨後杯ハ渡口
 移樽して定まり
 西北は秩父
 山を望み東南ハ
 堤塘の斜子運
 を見ると夏秋の
 産物多し常
 小漢人絶也



二其







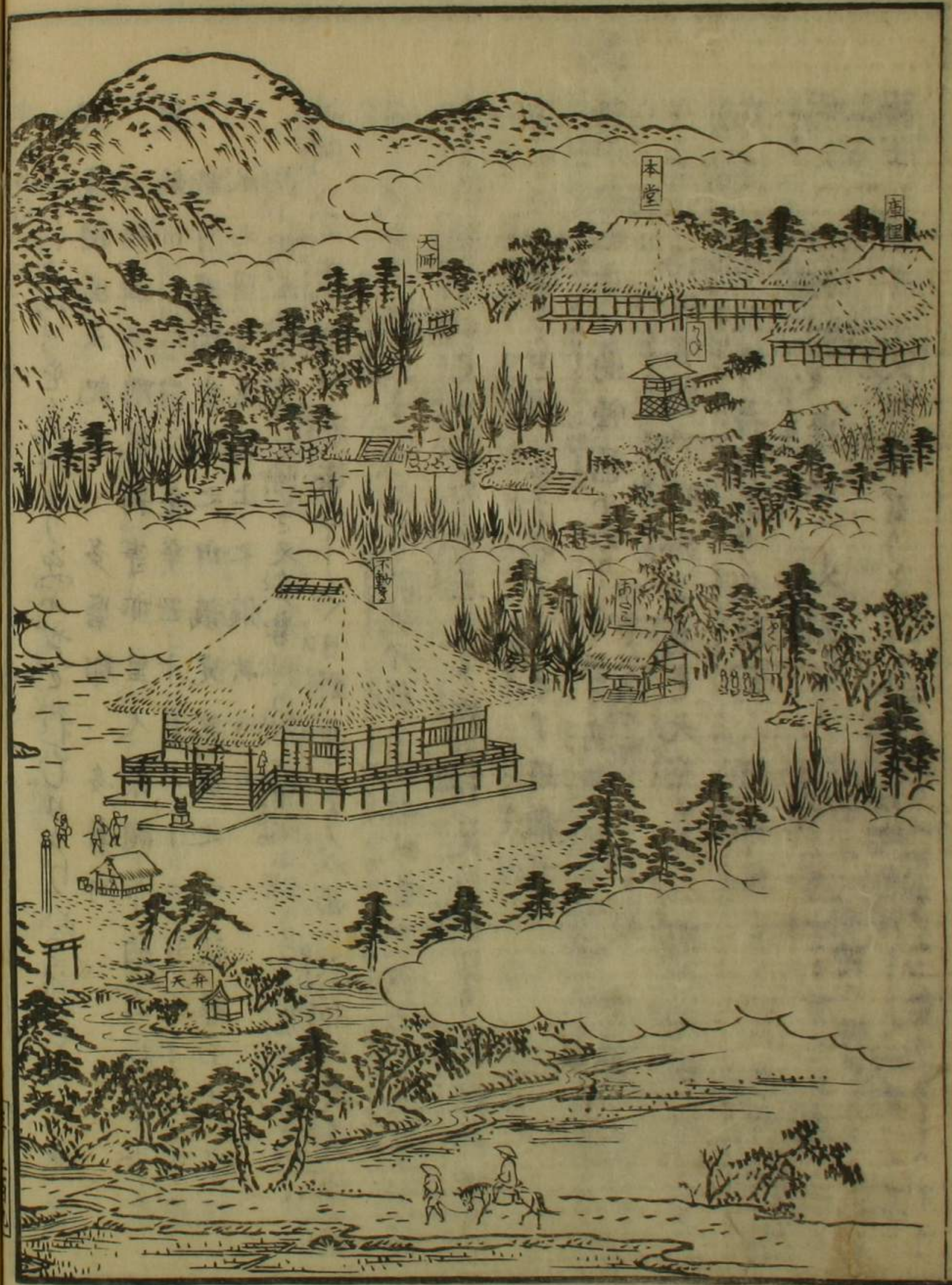
拾遺愚草
 大伴
 三々
 地保
 新
 法
 乙
 里
 定家



の返中... 滅せしめ... 又北條家の分限帳... 多波川とあり
水源ハ甲州丹波山田津義章の武蔵野地名考ニ發シ此丹波山を武蔵と稱す當國多摩郡
入ノ八日原川も會流す多摩郡日原小菅山等涉嶽山の麓を經く
青梅の南ノ傍羽村四谷止水の及ヒ福生拜島等の地ニ至ル又此地
ゆく秋川の流も落會甲州境の地より發して多摩郡伊奈村五日市
又石田と云ノ至ル淺井川も合村名の返は傍く流るる和泉村中島村等の
地より末ハ多摩荏原橋樹三郡の間を東流し海ニ會せり橋樹郡
登戸二子小杉平間河崎等の地ニ傍荏原郡ハ瀬田等ノカ下丸子矢口ハ橋塚
羽田等の地ニ傍流るる甲州國境より當國多摩郡羽村迄十餘里羽村
六郷迄十六里と云武蔵野地名考周流する九十里とありハ水源より行程
万葉 多摩河泊ル左良須氏豆久利佐良左良尔奈仁曾
許能見乃己許太可奈之伎
此詠を拾遺集意の四ノハあり人ありすとありて武川よつらに
さりゆありの人の怒りきやなるとあり又六帖ハ昔の今も
拾遺集 羽村やゆを地名の終焉をうつるるにぬむ川の里 定家

建保名所百首 武蔵國風土記曰 多磨郡 多磨河 東 鑑曰 仁治二年辛丑十月二十二日丙子以武蔵 野可被關水田之由儀定訖就之可被懸上多磨河 此河ハ武蔵野の勝槩中々日野津より以西ハ水石の美奇絶最 多一以東ハ平地と云々長流の徑ハ往々觀を改め亦勝景也 又ハ船を以て此川の名産とす故ハ初夏の頃より晩秋の頃迄 都下の人遠きを厭つてこゝへ來り遊獵せり 高幡山金剛寺 高幢邑東鑑ハ高幡三郎と云人の 名あり此所より物産を新義の真言宗 中々花洛三宝院御門跡ハ屬ト大宝より以前の開創あり 其後弘法大師再興あり又慈覺大師再興すといハ本寺不動 明王ハ古佛作不詳座像一丈餘あり 交光ハ布字十有九を刻し利益 脇士二童子化人の作なりといハ 詩記云或時忽然とて化僧一人來り 不可

高播
不動堂



なり予是を作し住持諾す依化僧ハ一室小入と戸を閉取て戸外にありと
不日や造功畢ぬ竟に異僧ハ去て平次方と云ふ云々平室の地は稻荷を勧請す
古鰯口一口 不動堂は懸り徑一尺九寸文字
九十四字を刻す野録左の通り

敬白 奉懸

右尋當寺者慈覺大師建立清和天皇御願所弟二建
立斗田陽成天皇
彼時頼義朝臣自於登山奉崇八幡弟三建立永意得
行登兩檀
大檀那美作助真并記氏一宮田人鍋師源恒有
文永十年庚酉五月廿日 銀念西守氏 鐵青蓮

服石 不動堂の後愛宕祠の傍あり中六尺七寸高サも五六尺あり
後諸の佛神小奉宿すとすハ概ハ解ますといふの所小忌明の岐上人此石を讀て

二王門 左右ハ金剛密額 高幡山 僧正泊如筆
迹の樹を置る

惣門 二王門の額 高幡山 僧浩然筆

鼻井 庫裡の前左の方の山の裾あり廣サ七尺斗の井泉を云相傳建武二年乙亥八月
四日の夜大風起り庫堂忽ハ顛倒す故ハ平地ハ引下りて諸人寒熱の二病腫物眼疾
等其餘諸病とのハ或ハ飲或ハ其痛所ハ塗りて平愈せしといふの事あり

鎌倉大草紙曰亨德四年正月廿一日武州府中分倍川原へ寄來る

成氏五百餘騎ゆく馳出短兵急よとり即き火出る程ハ攻戦ひるる
間上杉方の先もの大將右馬助入道憲顯深も負く引かひるる

高旗寺ゆく自害ハ鎌倉勢も勝軍ハあるれとも石堂一色以下百五
十人討死し戦ひ終るも分倍河原ハ陣を取云々 高旗寺とのハ當寺

縁起曰平山武者所季重幼より當寺の不動尊と崇敬し世ハ強
勇の名を顯せり治業の頃平家追討の時ハ鎌倉の右大將家ハ

屬ハ義経ハ隨ひく西國ハ趣き一の谷ハ勇を輝ハ武名世に
明らけハ故ハ後當山の頂ハ此ハそのの御堂を建立を然ハ建

武二年乙亥八月四日暴風の災ハ罹り殿堂破壊を依後平
地よりの山に其頃の財主ハ平助綱母ハ大中臣女等ありとのハ

爾來天下風水或ハ疫癘等の諸災あんとす時ハ佛鉢汗を生
しありとあり其威靈ハ枚挙をく

木切澤 金剛寺より半町を西の方の谷と云平季重御堂建立
の時此所より堂林を伐出ると云はれり

番近谷 同建一町を西へ入谷と云是も季重所堂
 別旅明神 金剛寺より三町を東の方別旅邑より此地の産

土神とす則金剛寺奉祀の宮社より傳へ云金剛寺の本寺不動
 明王の服士二童子を彫刻せ異僧との像を造る終るの後立去

らんとす近里の道俗喜悅のあり其跡小隨ひく此地より来り
 たる小件の異僧ハ忽よこをひなりぬ貴賤奇異と一此地一社を

建立一別旅明神と称す地名も又別旅邑とのやを
 平惟盛之墓 金剛寺より一町を西南平村 農民又右岸の

ととる人の構の中あり青き一片の板石より高ヤ七尺五寸あり
 中二尺程厚サ二寸あり上の方よきりく字を彫下ふ文永八年辛未

中冬、日とあり土人相傳へく平惟盛の碑なりと云往古此地ハ平助綱
 と云武士住居平氏の遠裔なるハ惟盛の菩提を吊んるる是哉

造るる 年歴を 或ハ又助綱墓なりとも云同南の方二町をり山を

平村
 平惟盛
 古墳



登^つり^く中^{ちゆう}腹^{ぶく}亦^{また}古^こ碑^ひあり^し刹^{せき}落^{らく}し^て讀^よみ^し只^{ただ}芥^{さい}の^一字^じの^ミ
鮮^{せん}明^{めい}あり^し高^{たか}サ^六尺^{せき}餘^{あま}を^巾二^に尺^{せき}を^下ハ^土中^{ちゆう}に^埋む^る餘^{あま}古^こ石^{せき}塔^{たつ}
二^に基^き何^{なに}も^も高^{たか}サ^四尺^{せき}を^下ハ^土人^{にん}平^{へい}山^{さん}季^き重^{ちゆう}或^{ある}又^{また}平^{へい}氏^しの^人の^墳墓^ぼ
と^も云^い傳^{でん}へ^て分^{ぶん}明^{めい}な^らず^す
此^こ所^{しよ}ハ^農民^{みん}平^{へい}氏^し某^{ある}家^け累^る世^のの^此地^ち邑^{えい}名^なを^平
堂^{だう}或^{ある}康^{かう}正^{せい}年^{ねん}号^{ごう}の^碑石^{せき}も^{あり}
と^稱一^{いつ}殊^{しよ}に^平氏^しの^人多^{おほ}し^里正^{せい}平^{へい}氏^しの^家ハ^小田^た原^{げん}北^{きた}条^{じょう}氏^し直^{ちやく}の^下
文^{ぶん}あり^しと^いふ

慈^じ岳^{かく}山^{さん}松^{しょう}蓮^{れん}壽^{じゆう}昌^{ちやう}禪^{ぜん}寺^じ 高^{たか}幡^{ばん}より^十二^に町^{ちゆう}斗^と東^{とう}南^{なん}の^方百^{ひやく}草^{そう}邑^{えい}に^{あり}
昔^{むかし}ハ^茂草^{そう}ハ^作る^八幡^{ばん}宮^{みや}社^{しゃ}地^ちハ^源頼^{らい}義^ぎ家^け兄^{あに}弟^{てい}奥^{おく}州^{しゅう}
松^{しょう}茂^{ぼう}陣^{じん}の^時山^{さん}号^{ごう}井^いを^改め^増成^{じやう}と^すと^云ふ 黄^{わう}檠^{じやう}派^{はい}の^禪林^{りん}に
一^{いつ}く^江戸^こ白^{はく}銀^{ぎん}の^瑞聖^{せい}寺^じハ^属せ^り昔^{むかし}ハ^天台^{たい}宗^{しゆう}也^{なり}と^云ふ 増^{ぞう}井^{せい}山^{さん}と^号し^て
天^{てん}平^{へい}年^{ねん}間^{かん}道^{だう}璿^{せん}の^高弟^{てい}釋^{せき}道^{だう}廣^{くわう}大^{だい}勸^{くわん}進^{しん}一^{いつ}始^{はじめ}て^七堂^{だう}全^{ぜん}備^びの^精舎^{しゃ}を
創^{そう}建^{けん}す^る後^{のち}康^{かう}平^{へい}五^ご年^{ねん}伊^い豫^よ守^{しゆう}頼^{らい}義^ぎ奥^{おく}州^{しゅう}下^か向^{かう}の^時此^こ地^ちを^よき^り
あ^らひ^松蓮^{れん}寺^じハ^投宿^{しゆく}一^{いつ}八^{はち}幡^{ばん}宮^{みや}を^再興^{かう}あり^し朝^{ちゆう}敵^{てき}追^{しゆ}討^{たう}の^所祈^{きん}願^{げん}
あり^し又^{また}建^{けん}久^{きう}年^{ねん}間^{かん}頼^{らい}朝^{ちゆう}卿^{けい}以^{もつ}来^{きた}源^{げん}家^け累^る代^の祈^{きん}願^{げん}所^{しよ}不^ふ定^{ぢやう}ら^れ建^{けん}長^{ちやう}

七^{しち}年^{ねん}當^{たう}寺^じの^住持^ぢ祐^{ゆう}慶^{けい}相^{しやう}州^{しゅう}あり^し琳^{りん}長^{ちやう}師^しを^請り^て禪^{ぜん}院^{いん}に^改む^ると
の^ミ慶^{けい}長^{ちやう}十^{じゆ}五^ご年^{ねん}松^{しょう}蓮^{れん}寺^じ方^{はう}丈^{ぢやう}建^{けん}營^{えい}の^棟札^{さつ}あり^し本^{ほん}尊^{そん}釋^{せき}迦^か佛^{ぶつ}座^ざ
像^{ざう}三^{さん}尺^{せき}斗^とあり^し脇^{わき}士^しハ^阿難^{なん}迦^か葉^{えつ}の^立像^{ざう}三^{さん}尺^{せき}なり^し佛^{ぶつ}師^し藤^{とう}村^{むら}中^{ちゆう}圓^{えん}
彫^{てう}造^{ぞう}せ^り所^{しよ}なり^しと^云ふ 中^{ちゆう}圓^{えん}ハ^華人^{にん}也^{なり}と^云ふ 肥^ひ前^{ぜん} 中^{ちゆう}興^{かう}開^{かい}山^{さん}ハ^慧極^{ごく}和^わ尚^{しやう}と
号^{ごう}せ^り 享^{きやう}保^{ぽう}六^{りく}年^{ねん}辛^{しん}丑^{じゆう} 享^{きやう}保^{ぽう}二^に年^{ねん}丁^{てい}酉^{ゆう}大^{だい}久^{きう}保^{ぽう}加^か賀^か守^{しゆう}忠^{ちゆう}英^{えい}彦^{げん}此^こ元^{げん}長^{ちやう}尼^に中^{ちゆう}興^{かう}開^{かい}基^きと^り
夫^ふ人^{にん}壽^{じゆう}昌^{ちやう}院^{いん}殿^{てん}慈^じ岳^{かく}元^{げん}長^{ちやう}尼^に中^{ちゆう}興^{かう}開^{かい}基^きと^り 元^{げん}長^{ちやう}尼^にハ^享保^{ぽう}六^{りく}年^{ねん}薙^ぢ禿^{とく}す^る
三^{さん}室^{しつ}を^漆敬^{けい}一^{いつ}竟^{けい}ハ^當持^ぢを^再興^{かう} 本^{ほん}堂^{だう}内^{ない}陣^{じん}の^額松^{しょう}蓮^{れん}壽^{じゆう}昌^{ちやう}禪^{ぜん}寺^じの^六
大字^{だいじ}及^{かつ}ひ^德門^{もん}額^{がく}慈^じ岳^{かく}山^{さん}等^{とう}ハ^何も^も中^{ちゆう}興^{かう}開^{かい}山^{さん}明^{めい}慧^{けい}極^{ごく}の^筆なり^し
本^{ほん}堂^{だう}の^前ハ^揚る^る紫^し金^{きん}光^{かう}の^額ハ^隱元^{げん}禪^{ぜん}師^しの^書なり^し
經^{きやう}筒^{とう} 三^{さん}箇^か其^{その}銘^{めい}文^{ぶん}左^さの^め一^{いつ}ハ^銅を^以製^{せい}す^る長^{ちやう}九^{きゆう}寸^{すん}二^に分^{ぶん}口^{こう}
廣^{くわう}ハ^四寸^{すん}五^ご分^{ぶん}

長^{ちやう}寛^{くわん}元^{げん}年^{ねん}癸^{みづ}未^づ 十^{じゆ}月^{げつ}十^{じゆ}三^{さん}日^{にち} 庚^{かう}
工^{くわう}匠^{じやう}藤^{とう}原^{げん}守^{しゆう}道^{だう}



茂草
松蓮寺

大勸進聖人
 僧玄久
 僧觀賢
 僧定久
 僧瑞久
 僧定阿
 僧堯尊
 僧辨意
 聖者
 如法書寫
 奉納妙法蓮華經
 不亥正孔元

同一箇
 銅を以て製す長七寸五分口廣さ
 渡り四寸一分其文左の如し

大勸進
 僧堯尊
 大檀主藤原氏満貞判
 永萬元年九月十七日天

其蓋裏曰
 大勸進所百草村
 松連寺

同一箇
 金銅を以て製す長五寸口廣さ
 三寸一分其文左の如し

兼
 釣命
 日本幕下
 祈
 建久四年八月
 一宮別當
 松連寺
 修之

八幡宮本地佛阿弥陀如来像金銅一尺四寸あり土中出现の物に
 佛躰の脊に鑄所の銘文あり左の如し

敬白治磨金銅影像法体
 佛皇帝日本主君當國府君光
 願回滿安徳素平信心法主
 悉地成就師長父母二親巨魂
 同往生乃至法界平等利益
 大歳庚戌孟夏之天
 日本武州多西吉富
 願主佛子慶祐敬白
 二年二月三日の条下武蔵國真慈悲寺八所祈禱の灵場なり
 東鑑文治

ともいふに、莊園寺に於て、僧ハ衣鉢の貯け失ふ
後、僧あり、今日、教上り、當寺より一切を安置し、破壊を修理せしむるの旨
申請の簡牘主職を補せらるゝとあり、又同書、建久三年五月八日の條、下ゆを
法皇四十九日の所、此事を南齊堂に於て修せしむる、百僧あり、僧衆ハ真慈
悲寺あり、三口とあり、又同書、治承五年四月七日の條、下ゆ、山田三郎友成、多
摩郡内、吉富井一宮、蓮光寺等の地を、自の所領に歸せしむる、其の田畠、さへ
吉富ハ此の地なりとあり、されども、真慈悲寺の頃、廢せしむる、其の田畠、さへ

八幡社記曰、建久四年、鎌倉右大将家法華經を書寫し、金壺に入て、當社に納
め、其書寫せる所の竹紙法華經の文字、多くハ朽敗し、僅に殘るのみ

升井、常は是を藏せ、尤清泉也

八國見、本堂の後の山の上あり、此所の登れハ八箇國の

二王塚、松蓮寺より東南五丁を隔て、山間の所、小高き所、古樹十
餘あり、地ガ名、松蓮寺とあり、此地を、新堂と云ふ、古堂宇
觀せり、古大伽藍あり、又寶藏と唱ふる、此地にあり、今、礎礎石、自然、一
八分の觀音の像、わたり、石瓶、折壞の刀劍、數十柄、華皿等のとらひ、此所
を、衆に、傳へり

百草八幡宮、松蓮寺より西の方山の中腹にあり、則、松蓮寺奉祀の

宮、八月十五日を以て、祭辰とす、本社向拜の額、八幡宮、三
字ハ、梅小路大納言定福卿の筆なり、寺僧曰、正殿に安置せしむるの

神躰ハ、八幡宮、神宮王仁、津戸明神、武内大臣、義家公等の木像
なり、と云、相傳、東平五年、源賴義、義家、兩公、奥州の夷賊征伐の時、
山城國、男山、正八幡宮の社檀の土を穿ちて、石瓶、盛來、一宇の
社を造営し、此地に、勸請なり、願書等を収め、其後、凶
徒悉く平け、凱哥の時、再、此地に、至り、金銅の觀世音の像
をも安置し、永く祭祀を不朽と傳へんと、
石の祭田を寄附、且、兩將軍の隨兵、各軍功を祈り、帶せしむる、
刀杖を収め、神徳を謝せ、尔來、鎌倉賴朝、卿當社の神を崇敬し、
あひ、建久四年、法華經を書寫し、金壺に入て、奉納あり、
星霜を経く、件の宝器散失せし、正徳年間、二王塚の地を穿て、
再、是を得、寺僧云、當社境内の樹木、枯る、後、奥州の
奥州の方へ向く、倒る、昔より、今に至り、是當社に
一奇変ありと云

一宮大明神社

百草八幡宮より十五六町北の方多麻川の南岸一宮

村あり一里あり西南祠官新田氏大田氏両家より奉祀を祭

神ハ天下春命なり後瀬織津比咩及び稻倉魂大神を合祭して

三神一社三扉とす祭神今ハ小野舊事本記ニ饒速日命

此葦原の中津國ハ降臨しあみ時輔佐とて隨駕しあみ

三十二神の其一神ゆく即三十二國ハ分降あみ時信濃國ハ

天表春命武藏國へハ天下春命降臨なりあみ國を開きあみ

と云々

社司相傳神代の昔當社下春命此地ハ止まらば或ハ又國の祖の神ハ此に
後小國神代記に記すあり小野神社ハ三神と云々
命ハ野宮村小野神社ハ遠座あり倉箱魂命を配祀し小野神社ハ三神と云々
時世詳ならず然レ一宮ハ國の祖神小野宮ハ同郡の旧社ありハ國造崇峻ありて倉箱
魂命と共ハ合せ再ハ六所の宮の相殿ハ建しあみ時を祀す
備けられしとあり又毎歳五月五日六所宮大祭の辰當社の祠官用中ハ至
三所の神輿を供奉しあみ時を祀す
又供奉し六所宮ハ至り神代記に記す後件神代記に記す直一宮ハ歸り當
社の内殿ハ秋葉盛を供し祭奠をなすと云々元ハ社ハありしと云々

一宮大明神社



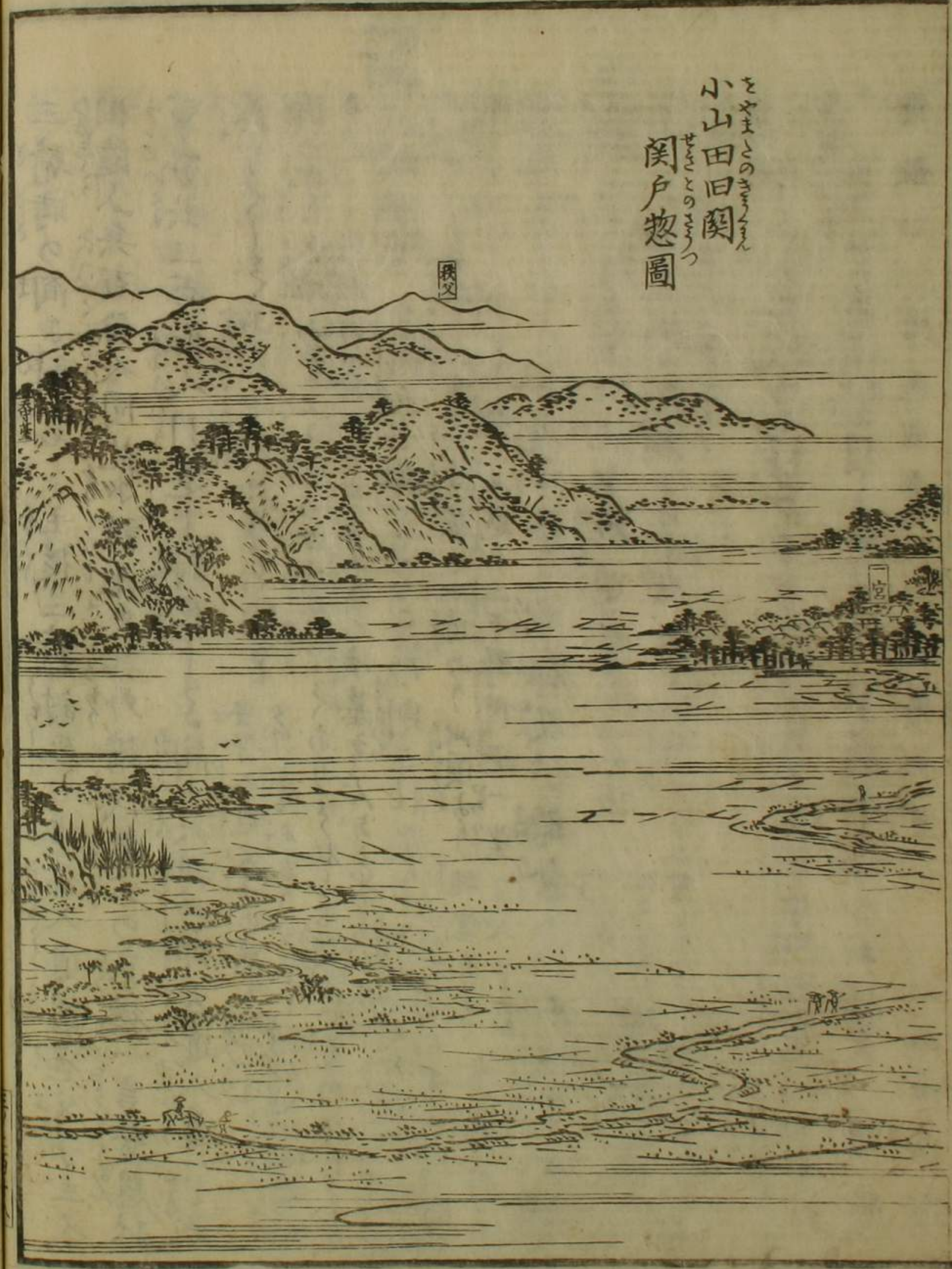
横溝八郎墳墓 小山田田関の地より一町あり西南道より右の方の畑の中あり塚上松槻等の老樹繁茂せり太平記は正慶二年五月十六日新田左中将義貞公武州分倍河原へ押寄るといふ条下より四郎左近入道相模入道の合衆大勢なりといふも三浦一時的謀破られて落行勢ハ散る小鎌倉をとりて引退く討る者ハ數を不知大将左近入道関戸辺あり已に討れぬく見えると横溝八郎踏止りて近付敵二ト一本獲一宮より南の方半町ありを隔て耕田の中より樹の本に注連を繞らせり土入百草八幡宮の一鳥居の跡なりと云八幡宮へハ二間

横溝八郎墳墓 小山田田関の地より一町あり西南道より右の方の畑の中あり塚上松槻等の老樹繁茂せり太平記は正慶二年五月十六日新田左中将義貞公武州分倍河原へ押寄るといふ条下より四郎左近入道相模入道の合衆大勢なりといふも三浦一時的謀破られて落行勢ハ散る小鎌倉をとりて引退く討る者ハ數を不知大将左近入道関戸辺あり已に討れぬく見えると横溝八郎踏止りて近付敵二ト

三騎時の間ハ射落し主後三騎討死を安保入道道堪父子三人相隨み兵百餘人同枕し討死を其外譜代奉公の良後一言芳恩此軍勢共三百餘人引返り討死し間ハ大将四郎左近入道ハ身恙なく山内迄引れり安保入道父子の墓も此近きあり構の中ハ古墳あり上ハ樞の古樹茂りありされとも何人の墓の印あり小山田田関旧址今関戸と称せり則これなり左高北場野社邊眼下ハ玉川の流を平臨又遙ハ上下野州近一望ハ多麻川の南岸よそひく古府中あり帝都及ハ鎌倉への街道あり東奥北越の二道共ハ此地を往還せざるハなり小山田ハ莊の名あり此地あり一かり今ハ邑名よの残まると此所より二里を南の方ハ小山田村と稱せり

夫本抄 或為世 六百番奇合 頭昭 東鑑曰 治承五年 四月廿日 小山田三郎

をみやまのきんぎょせん
小山田曰関
せんとりのまじつ
関戸惣圖



六百番奇合
あまの
苗代水
川とあ
とろ
の
小山田
頭昭





関戸
天守臺



右の方畑の傍は榛木の老樹を以印とせし古塚あり正慶二年
武蔵野合戦は討死せし四百餘人の墓なりとせし

城山 延命寺の後の山積を以土中稀は古瓦を得るありとせし

其城主及び時世等詳ならず土人云昔小田原北条家の幕下関戸
駿河守とせし人々ありとも又永祿の頃佐伯市助道永といふ侍

武士小田原の北条家仕へ此地に住せしとせし

明徳元年庚午念阿護法入道此地一寺を創建ありて吉祥山

壽徳寺と云禪院を再興せし

なり日舜宗惠大和尚を請へて中興関山とせし

年己巳二月三日陸奥小磯死に道永の子孫三河守道也和泉守道安同集人

天守臺 同一山積西の方あり城山の半腹より曲折し山頂は近頃山頂

まて老松繁茂す此所より四望せし尤絶景なり

推現の宮とせし

沓切坂 下関戸の宿の南の坂を云坂の上と古市場と唱ふ昔高戸

驛舎あり地なり天正己来此地の古道廢し今ハ名のみとな

場なり 今も相州大山石尊富士詣杯 相傳正平七年壬二月八日武蔵野

合戦の時新田義貞公脇屋義治公纒は二百餘騎討死せし此所の

勢も散るは行方ありなりハ迎ひ討死せし命も是ハ鎌倉へ

打入り足利左馬頭基氏逢ふ命と失はせと夜半過り頃関戸を

過りひらき石堂入道三浦介等の五六千騎の勢は出逢りハ神

奈川を徑鎌倉へ打入勝利を得る頃此坂より馬の沓をとり

てたせあり打あを依る名とすとのみ

赤坂臺 関戸より十六七町東の方蓮光寺村を横きり赤坂と号

く坂を登れハ赤坂臺なり一里半を徑り河原谷と云地あり

平臺 赤坂臺の東の積を以此所は三圍はあまねる老松一株あり

土人甚兵衛松と字を此地ハ矢の口ニ属す

騰雲山明覚寺 矢の口村街道より南の横より渡一場の南拾五町

ありありと臨済派の禪林や鎌倉建長寺に属す本寺釋迦如来ハ

唐佛や座像八寸をかり河是當寺ハ往古足利義晴公建立なり

佛刹や其後廢寺となりて慶長年間加藤太郎左衛門再興

して菩提寺となりて云中奥閑基ハ揚雲和尚祿元年と号當寺に

長坂血鎗九郎陣中守護の為鎧の中小籠なりと云今伽羅の正

觀音を安置せり立像三寸をかり弘法大師の作と云今一尺斗の

正觀音を彫造して軒中ニ秘安せり

小澤小太郎居宅旧地 當寺境内の辺を云今猶馬場の旧跡なりと

稱する地あり又當寺の前は小高き岡ありて藏地下と号く頃

兵糧を収める倉の跡なりと云此の小澤の城址の茶下也小澤某の墓と

州原山威光寺 同所明覚寺より道を隔て一丁斗向山側二丁斗左へ

入るあり新義真言宗中より坂濱高勝寺に属す本寺ハ大日如来

座像三尺をかり河是當寺ハ穴澤天神の別當なり

東鑑曰治美四年庚子十一月十五日 御祈禱所院主僧

武蔵國威光寺者依為源家被代御祈禱所院主僧

僧同相兼之僧坊寺領如元被奉免之云云

武蔵國威光寺二年院主長榮月三日夜不怠然平家滅

亡畢有御感沙汰之處給御下所祈申也下畧

領之由捧去元年九月所給御領之日由寺僧捧解狀仍

書曰文治元年九月所給御領之日由寺僧捧解狀仍

小書曰其妨高年所妨威光寺領之日由寺僧捧解狀仍

令可止其妨高年所妨威光寺領之日由寺僧捧解狀仍

所可止其妨高年所妨威光寺領之日由寺僧捧解狀仍

廣藤判官元二邦道等奉行之下宗尊尚橘判官代以

武蔵國威光寺二年院主長榮月三日夜不怠然平家滅

去月廿六日率五十餘人惡黨乱入寺領及前田狼

あり相江入道ハ多麻郡相江郷の主なり今同郡佐須村に其旧館の地と

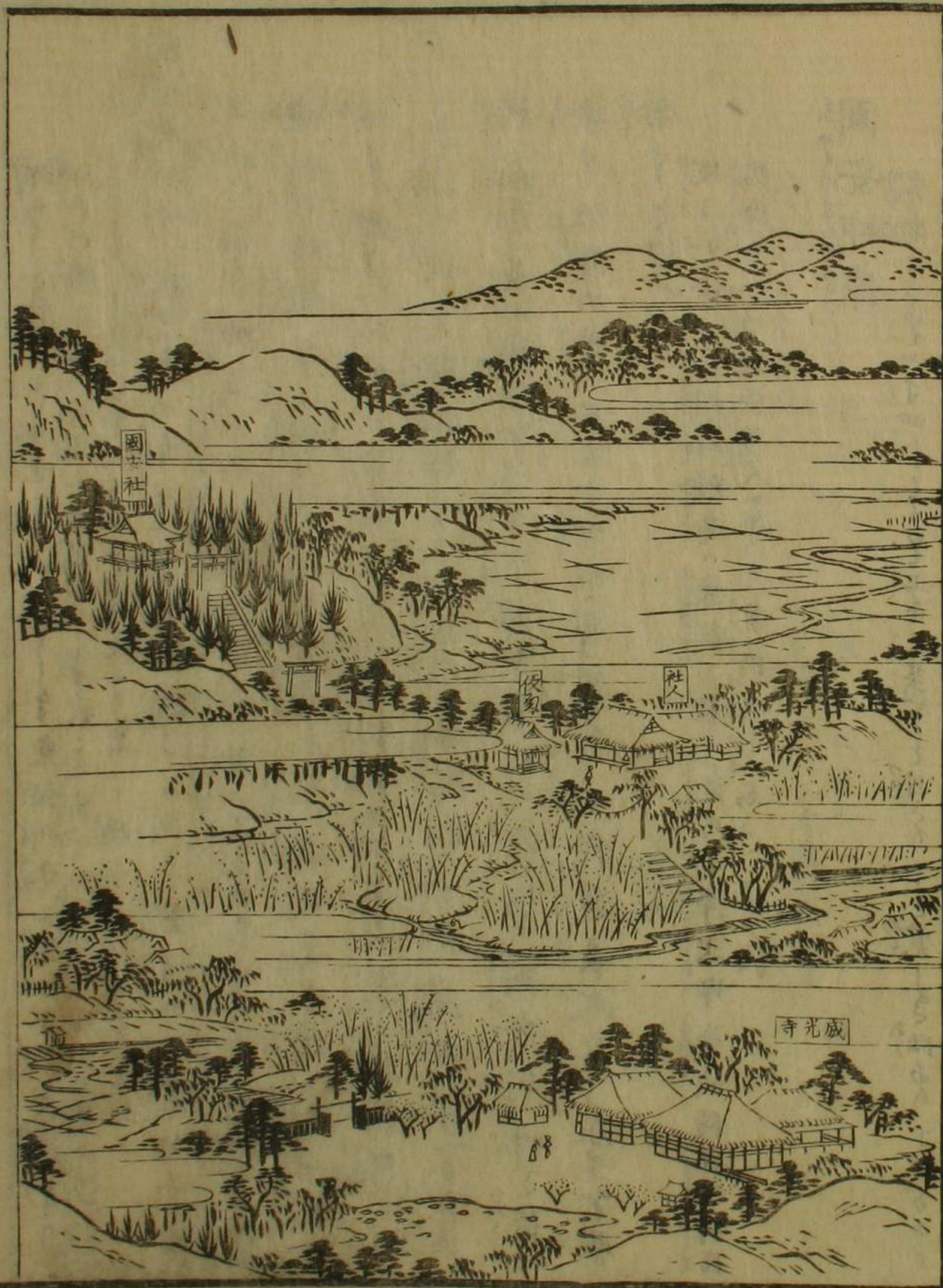
入道増西五十餘人の惡黨率率當寺の寺領の田を劫掠し其舊館の地と

光寺あり由其寺の惡黨率率當寺の寺領の田を劫掠し其舊館の地と

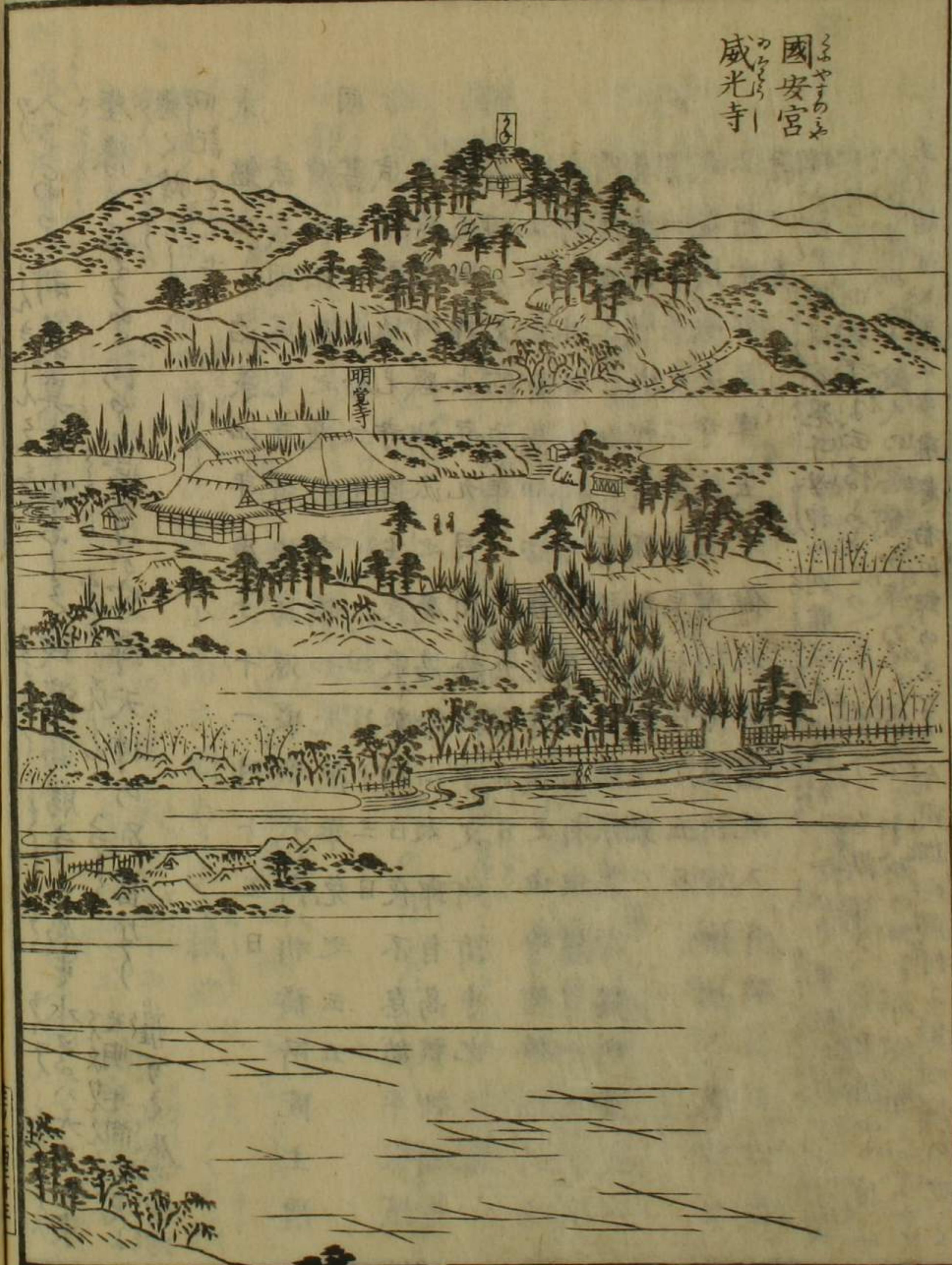
被下畧江戶藤谷鬼子母神の別當威光山法明寺を以て東鑑に載る所の威

光寺あり由其寺の惡黨率率當寺の寺領の田を劫掠し其舊館の地と

あり相江入道ハ多麻郡相江郷の主なり今同郡佐須村に其旧館の地と



國安宮
威光寺



称するものありて此地より程遠くす東鑑州本は拍江は作ら誤り
 江戸の雅司谷其間七里隔つへしされとも當寺は天明年間の大災日記に
 ありて古を考へ合さたよりな猶多日訂正まことのこと

國安明神祠

威光寺の南五十歩を隔て同一側左の小道を三十歩

申入るあり神主山本氏奉祀す神躰ハ左のめきとのやくせよ云所の

鑄形の神像なり相傳へ往古小澤左衛門尉國高とて人此地を

領す國高此地は道遙あり一頃松樹の下は白髪のお翁現し尔

しく曰く我ハ大國主神なり此地は崇祀らハ万民國安わくと云

國高奇異の思ひを宮居を営んでたわ國安明神と崇め

祭す社領の地八百五十坪を寄附ありて武運長久なるを祈

念すとのみ

按は小澤左衛門尉國高ハ東鑑よ奉る所の小澤次郎重政同左近將監
 信重なるの氏族の人なるん其時世今もくくく

國安神像

銅物その寸六寸四分をもち天蓋を付たり一と覺き路あり下の方を

花瓶のめきとのありて

上の方よりあり神躰を

僧形ありて宝珠と

劍とを持しあり

形なり



穴澤天神社

谷口邑威光寺より東北の方三町身を隔て同一往還

右の方小道を入てあり社ハ山の中腹ありて此邊を小澤ヶ原と唱今

祭神詳ならず後世管神を合祭せり祭礼ハ七月廿五日なり又同日

神樂を修行し九月廿五日ハ獅子舞を真行を別當ハ真言宗はて

威光寺と号す

延喜式神名帳曰

穴澤天神社云

武藏國 多磨郡



穴天神社
 此の山頂は小澤の
 重成の屋敷と号す
 文明の祖と号す
 吉里宮内左馬守尉
 山下山より
 穴天神社
 此の山頂は小澤の
 重成の屋敷と号す
 文明の祖と号す
 吉里宮内左馬守尉
 山下山より

武蔵國風土記殘編曰 武蔵國 多磨郡
穴澤天神 圭田三十六束三毛田 孝安天皇
四年壬辰三月所祭少名彦神也云云

當社の麓を淵水流とく多麻川を合せ其流を隔て山岨一の
巖窟あり故に穴澤の名あり昔の巖洞は崩れたりと今新堀
穿て洞穴あり洞口ハ一ヤク内ハ二ツに分てあり
内種々の神佛の
石像を造立す

小澤城址 谷口天神の山積浅間山の西に並へ東鑑元久二年己丑六月

廿三日稻毛入道大河戸三郎が為す誅せし子息小澤次郎重政ハ守佐美與

是を誅せし又同書同年十月三日小澤左近將監信重綾小路三位師季此

息女を相伴く京都より参着を行先を以夏の由を尼御臺に啓せ下畧又

同月四日夜に入綾小路の姫君尼御臺所の法亭に参ら御猶子とて此後を

武蔵國小澤郷 梅入道 知仍せしるへきの由何らとあり鎌倉大草

紙ハ文明九年長尾四郎左衛門尉景春山内上杉の家務職を兼ら

るを憤り逆心を企頭定を亡さんとて武州相州の内一味同心に

兵を催し上杉家を襲ふとのる茶下は金子掃部助ハ小澤と云

城は指籠る間大田左衛門入道下知とく扇谷より勢を遣し同

三月十八日溝呂木の城を攻落を同日は磯の要害を責らる一日防

戦ひ夜に入られ越後五郎四郎が介とて城を渡し降参を夫あり

小澤城へ押寄せし城難所あり落とて中景春一味の宝相

寺なりハ吉里宮内左衛門尉以下小澤の城の後詰として横山より

打出當國府中陣を取中同年四月十八日金子掃部助が籠る

小澤の城も責落せしあり

向の岡 今向岡と称する地ハ多麻川を北に帯て西ハ関戸より發る

東ハ末長に終るもの是なり連岡の長九六里ありあり

或ハ云今向の岡と称する連岡向の岡ハあり武蔵國風土記殘篇より

て考ふるハ多磨郡北向の岡に限りとあるを以て此地ハあり

西二十里の連岡なり四方共武蔵野に何れの方より岡は相對する

故に向の岡の名ありとつり依て今向の岡と稱する地ハ都筑の岳とて佳

なるんと考ふる否ハあはれとて誓く是をこらふ奉るの

武蔵國風土記殘編曰
多磨郡東限草窪岡西限金川南限華田浦北限向
岡云云

新勅撰
武蔵野の向の岡は多磨郡に在りては名をたてしむるは

續古今
新勅撰の向の岡は多磨郡に在りては名をたてしむるは

玉葉
秋夕の経圖をこれに記すはむづかしの事なきにふり

同
ゆづく日向の岡は多磨郡に在りては名をたてしむるは

夫木
とて多磨郡の岡の東のふらりては名をたてしむるは

の家集
このふらりの岡の小松原とては名をたてしむるは

お林名所考
夕日とては名をたてしむるは

都筑の岳
綴喜或は綴喜の嶺より小山田里迄は多磨郡に属せり

横山
横山なりては名をたてしむるは

案内山
案内山と云より神奈川迄の間は都筑郡に属せり

坂東路
坂東路凡百里をよりては名をたてしむるは

青沼明神
同所長沼村八王子通道の傍にあり祭神大田命猿田彦

大神二神なり
勧請の初とありては名をたてしむるは

八月十五日なり
大平記に正平七年閏二月小手差原合戦の条下に將軍の御陣へ

仙谷山
仙谷山壽福禪寺谷の口の東の山續矢の口渡一場より十三町東南の方

菅村
菅村は多磨郡に在りては名をたてしむるは

創
創なりては名をたてしむるは

より
より禪林とては名をたてしむるは

本堂
本堂本尊十一面觀世音同願なりては名をたてしむるは

鐘
鐘を寄進すは名をたてしむるは

阿弥陀堂
阿弥陀堂六寸作着不知左右地蔵多門ホの像を安置す

大黒
大黒天の四座をまつる擁護廟

指月橋
指月橋當寺外に架かる橋

鎮守宮
鎮守宮當寺に在りては名をたてしむるは

十境
十境の一なり

十境
十境の一なり

十境
十境の一なり

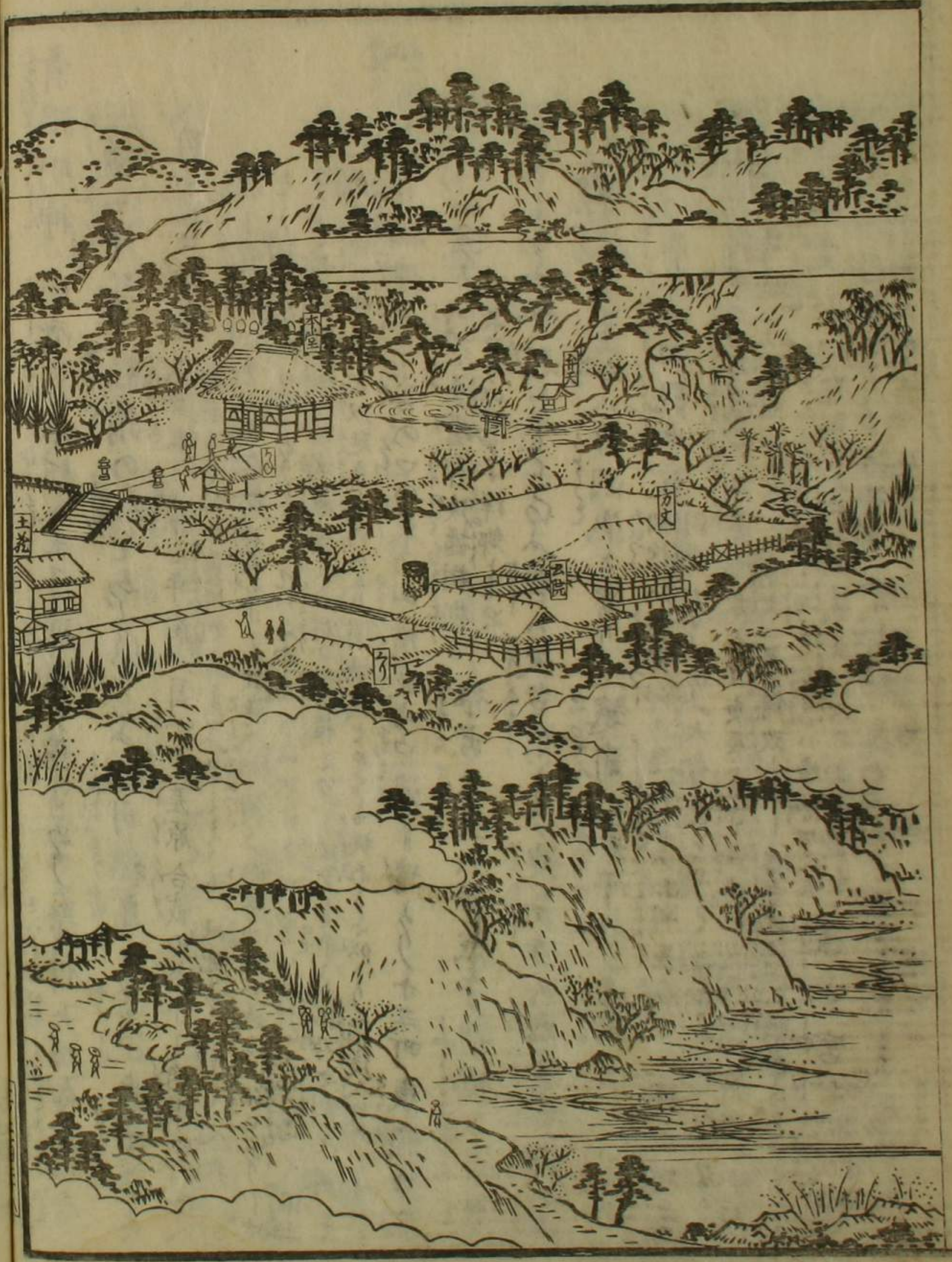
十境
十境の一なり

十境
十境の一なり

十境
十境の一なり

十境
十境の一なり

壽福寺

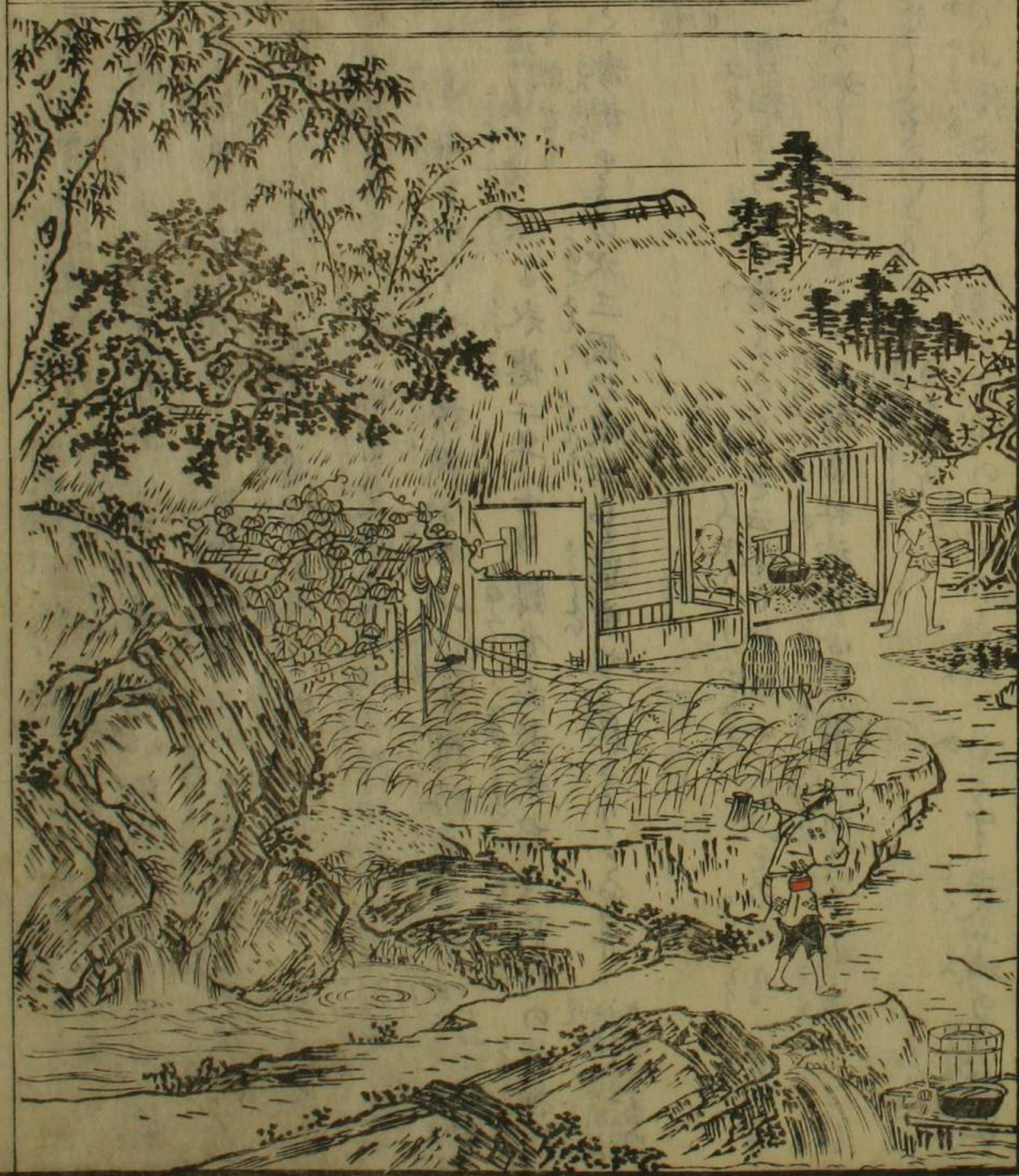


餐霞谷 同所の庫裡の後の谷と云道徽の旧跡なり 故今採薬卓泰徐福
採り仙薬を攫霧松 同所園の左あり今ハ枯る 土俗道祖神と云一振五
方丈 曉成室とのみ 枝中霧を攫うはさかふ名とす 當寺十境の一なり
大般若経 六百卷 梵画は紙ハ黄色ヤ 飛慶普地ニ想ひ曾祖の例跡を追ひ當
寺觀音の尊前相傳入文治年間源義経ハ飛慶普地ニ想ひ曾祖の例跡を追ひ當
其名を注せり 相傳入文治年間源義経ハ飛慶普地ニ想ひ曾祖の例跡を追ひ當
觀音の尊前相傳入文治年間源義経ハ飛慶普地ニ想ひ曾祖の例跡を追ひ當
補寫す 永徳士成鎌倉左兵衛督氏満師の徳を慕ひ参詣の次再ハ此徑の靈損を修
枕義和之之後像也亦有建太子夫
州人墨長因寺曰道人道鏡若以資薦之入阿弥尼公終焉之地者
欲長時來寺之像同刻寺焉爾以面觀自而大空藏人年矣故
運排付寺之像同刻寺焉爾以面觀自而大空藏人年矣故
斯奧之像同刻寺焉爾以面觀自而大空藏人年矣故
後逆木焉爾以面觀自而大空藏人年矣故
果徒同自爾以面觀自而大空藏人年矣故
遇陣也 康平感在石室者或曰
夫仙谷山壽福寺者推古天皇六代戊午年聖德皇
太子就于高橋妃之推古天皇六代戊午年聖德皇
建七區練若以資薦之入阿弥尼公終焉之地者
有曰道人道鏡若以資薦之入阿弥尼公終焉之地者
亦曰道鏡也 今古怪異之事甚多矣 積有年矣 故
像因標福一福者曾聖躡夷地之事遠而大空藏人年矣 故
之後長曜侍者膳虛空一經軸之遠而大空藏人年矣 故
之手墨鏡侍者膳虛空一經軸之遠而大空藏人年矣 故
之人時來寺之像同刻寺焉爾以面觀自而大空藏人年矣 故
和州長谷寺之像同刻寺焉爾以面觀自而大空藏人年矣 故
義州長谷寺之像同刻寺焉爾以面觀自而大空藏人年矣 故
枕義州長谷寺之像同刻寺焉爾以面觀自而大空藏人年矣 故

重政每晨旋步像前勉於晨香夕燈修現當之善因
矣梵函大般若暫愆行於此地追曾祖之例跡祈
源義泊辨慶舊寫經之闕而今尚存矣 雖祈
後之應驗特復舊寫經之闕而今尚存矣 雖祈
遭兵災和尚卓錫此地力與荒廢始建長安禪
六方慶和尚卓錫此地力與荒廢始建長安禪
集永德士成鎌倉左兵衛督氏滿師之德而參謁
山全雅慕師之德而參謁
蠱損造營三師之德而參謁
會堂彌陀善迹像於善應慶十次再修此經之
尊八幡大菩薩之稱荷大善應慶十次再修此經之
圖之鞏固祈佛蓮之紹隆而慶於不護廟絲是仰
應永十四丁亥稔六月十八日 以門宗圓敬記焉

相傳推古天皇六年戊午聖德皇太子高橋の妃の亡妣入阿弥尼公
終焉の地ニ就て七區の練若を勸建一以冥福を資の舊跡なり
山を仙谷とのりて仙人道鏡なる者此山ニ隱栖一練行修身事積
年あり故亦道鏡谷とのりて今古怪異の事甚多一是寺を壽福といふ
曾て艾榛夷地の時虚空藏薩埵の像を得たり因て福一満の聖跡を

吐玉亭水



標して以て寺の速大を祝也 後建長耀侍首虚空藏經一軸を贈るのみ

康平年間八幡太郎義家奥州征伐出陣の時中路茲に宿を其頂當

寺本より不用運を祈る後果して感遇を獲ると昔小澤小太郎重政毎

晨歩を像前より旋々現當の善因を修す然る兵災に遭く寺宇既に

敗壞せり年久し爰に鎌倉建長寺の大安禅師大方慶和尚此地に

卓錫し荒廢を興し始々禅風を振ふる故に僧俗雲集也 或云建長寺

和尚是坊の大方慶然る永徳二年壬戌鎌倉左兵衛督氏満師の徳操を

慕ひて参謁せり次三個の殿宇を造営せられりと云り 三個といふ所

展翼峰 壽福寺の左に續々山を云俗に神明山といふその形鳥の翼也

展翼 如く故に号とす相傳當社神明宮ハ昔小机より飛来つに

鎮座なりと云り 壽福寺十

浅間山同一山續々山頂に浅間の小祠あり其名とす夫ハ城の浅間山

と云是も壽福寺十境の一なりと云り 光昭崖と号す荆棘を多き小
篠をまげ登るる數十歩絶頂に至り崖は臨みて眺望せれば眼界
蒼茫とす山水の美筆端に尽しかと云り 浅間の祠あり其城跡と稱せり

吐玉泉 壽福寺より後の方の谷を隔て西の山際農氏の地あり水源

白砂を吹出せり故に号とす昔小澤の白清水といふ是も壽福寺

十境の一なり

大谷山法泉寺 吉祥院と号す壽福寺の南十町を隔て菅村の

内府中道の右にあり 縮毛頭にて 天台宗なり深大寺村の深大寺は

属せり阿弥陀如来を供奉とす

薬師堂 寺より西の傍一河半あり毎歳八月廿日獅子舞あり弓を携へ

本より薬師如来の像ハ慈覚大師彫造し多入との相傳左馬頭義朝の

御臺所常盤御前護持の靈像なり 文治三年丁未八月叡山の文



根明神



法泉寺

本堂

顯阿闍梨此地の領主稻毛三郎重成と共に謀り當山を闢き
 一字の梵刹とて此靈像を安置せし後平政子御前崇敬あり
 其頃頼朝卿より香花の資料とて當國高麗郡の地を寄
 附せし建久八年丁巳頼朝卿當寺へ詣り又康元二年丙辰
 五月頼朝公頼經公の菩提の御堂再興なり又ひより大伽
 藍となりて正慶建武の兵乱に廢壞せしより後日貫又復せり
 りなるとして鐘兜唐木小机等此二品は頼朝卿の寄附なりと云
 傳く當寺の什宝とす

江戸名所圖會天璣之卷畢

江戸名所圖繪全部廿卷目次

- 壹之卷三冊
 日本橋本町通神田小川町飯田町兩國靈巖島八町堀築地
 鐵炮洲芝口愛宕下西久保赤羽根三田魚籃白銀芝浦
 品川驛大井鈴ヶ森池上矢口大森蒲田八幡六郷川崎鶴見
 生麥神奈川本牧程ヶ谷杉田金澤
 外櫻田霞關永田馬場平川溜池麻布廣尾青山目黒碑文谷北澤
 世田ヶ谷澁谷四谷千駄ヶ谷代々木高井戸武藏野府中玉川向ヶ岡
 出版
- 二之卷三冊
 市谷牛込小石川大窪柏木成子堀之内中野小金井築土高
 田大塚雜司ヶ谷巢鴨板橋練馬大宮野火止
 湯島上野日暮根津谷中三寄駒込王子川口豐島川
 發行
- 三之卷四冊
 淺草下谷根岸山谷橋場千住西新井
 發行
- 四之卷三冊
 深川本所龜戸押上柳島隅田川木下川松戸行徳國府臺
 八幡船橋
 發行
- 五之卷二冊
 發行
- 六之卷二冊
 發行
- 七之卷三冊
 發行

天保五年甲午孟春

日本橋通壹丁目
淺草茅町二丁目

須原屋茂兵衛
須原屋伊三郎



三都發
行書林

京都寺町通松原下ル 勝村治右衛門

大坂心齋橋筋唐物町 河内屋太助

大坂心齋橋筋安堂寺町 秋田屋太右衛門

江戸兩國吉川町 山田佐助

江戸神田鍛冶町二丁目 北島順四郎

江戸淺草新寺町 和泉屋庄次郎

江戸芝神明前 岡田屋嘉七

江戸日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛

江戸日本橋通二丁目 小林新兵衛

江戸日本橋通四丁目 須原屋佐助

江戸南傳馬町壹丁目 須原屋文助

江戸神田通新石町 須原屋源助

